三嶽西遺跡

――長野県塩尻市中西条地区土地改良事業
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書――

1989

塩尻市教育委員会

三嶽西遺跡

――長野県塩尻市中西条地区土地改良事業
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書――

1989

塩尻市教育委員会

序

三嶽西遺跡は中西条三嶽神社の西方に広がる扇状地上にあり、日照、水利、展望ともによく恵まれた環境にあります。こうした好条件を反映して付近からは縄文・平安時代の遺物が古くから採集され、注目される遺跡として今日に至っています。この度、中西条土地改良事業共同施行がこの地域に入り、遺跡の一部が破壊されることになったため、埋蔵文化財保護の立場から市教育委員会に緊急発掘調査が委託されたものであります。

発掘調査は秋本番の9月末から10月下旬にかけて行われ、折りしも続いた好天気と地元の方々の深い御理解により、おかげさまで作業も順調に進み、数多くの貴重な成果をおさめることができました。

終わりにあたり本調査が無事完了するについては、中西条土地改良事業共同施行委員長、小沢泉氏をはじめ役員、地権者の方々、並びに地元の方々の深い御理解と御援助によるものであり、ここに衷心より敬意と感謝をささげる次第であります。

平成元年2月

塩尻市教育委員会

教育長　小　松　優　一

例　言

1．本書は塩尻市中西条土地改良事業共同施行に伴い、昭和63年９月27日から10月21日にわたって発掘調査した三嶽西遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査経費については、塩尻市中西条土地改良事業共同施行からの委託金、および国庫、県費補助金による。

3．遺物および記録類の整理作業から報告書作成は、昭和63年11月から平成元年２月にかけて行った。分担は次のとおりである。

遺構…整理、トレース：鳥羽、桜井。

遺物…洗浄、註記、復元、実測、拓本、トレース：小林、鳥羽、市川、古厩、太田、中村。

図版組み…小林、鳥羽、桜井、中村。

写真…鳥羽。

4．本書の執筆は各調査員が分担して行った。分担は次のとおりである。

第Ⅰ章、第Ⅱ章第１節、第Ⅲ章第２節、第Ⅳ章遺構……鳥羽嘉彦

第Ⅱ章第２節……市川二三夫

第Ⅲ章第１節、第Ⅳ章遺物、第Ⅴ章……小林康男

5．本書の編集は鳥羽が行った。

6．中・近世の遺物については原　明芳、野村一寿各氏の御指導を得た。銘記して感謝申し上げたい。

7．調査にあたり、塩尻市中西条土地改良事業共同施行委員長小沢　泉氏ならびに関係役員の各氏、および地元の方々の御理解、御援助をいただいたことを明記し、お礼としたい。

8．本調査の出土品、諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

目　次

序
例　言
第Ⅰ章　調査状況 …… 1
第1節　発掘調査に至る経過 …… 1
第2節　調査体制 …… 2
第3節　調査日誌 …… 2
第4節　遺跡の状況と面積 …… 4
第Ⅱ章　遺跡周辺の環境 …… 5
第1節　自然環境 …… 5
第2節　周辺遺跡 …… 8
第Ⅲ章　遺跡の概要 …… 9
第1節　遺跡の概要 …… 9
第2節　発掘区の設定 …… 11
第Ⅳ章　遺構・遺物 …… 13
第1節　Aトレンチ …… 13
第2節　Bトレンチ …… 13
第3節　Cトレンチ …… 13
第4節　Dトレンチ …… 14
第5節　Eトレンチ …… 16
第6節　Fトレンチ …… 16
第7節　Gトレンチ …… 18
第8節　Hトレンチ …… 21
第Ⅴ章　まとめ …… 37

第Ⅰ章　調査状況

第1節　発掘調査に至る経過

12月27日　昭和63年度文化財関係補助事業計画について（ 提出）
4月7日　昭和63年度文化財関係国庫補助事業の内定について（通知）
4月26日　昭和63年度国宝重要文化財等保存整備補助金交付申請書について（提出）
5月31日　昭和63年度文化財保護事業県費補助金の内示について（通知）
6月16日　昭和63年度文化財保護事業県費補助金交付申請書について（通知）
6月21日　昭和63年度国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付決定について（通知）
8月25日　昭和63年度文化財保護事業県費補助金の交付決定について（通知）
8月26日　昭和63年度国宝重要文化財等保存整備費補助金計画変更承認申請書について（提出）
9月13日　市農政課、市教育委員会により、三嶽西遺跡の調査箇所についての現地協議
9月16日　中西条地区地元関係役員説明会
9月17日　中西条地区土地改良事業埋蔵文化財包蔵地発掘調査について（依頼）
9月20日　中西条地区土地改良事業埋蔵文化財包蔵地発掘調査について（回答）
9月20日　中西条地区土地改良事業埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託について（契約）
9月24日　埋蔵文化財三嶽西遺跡の発掘調査について（通知）
9月30日　昭和63年度文化財保護事業県費補助金計画変更承認申請書について（提出）
11月8日　三嶽西遺跡発掘調査の終了について（届）
11月8日　三嶽西遺跡文化財の拾得について（届）
11月12日　三嶽西遺跡埋蔵物の文化財認定について（通知）

発掘調査実施計画書（一部のみ記載）

2、遺跡名　　三嶽西遺跡
4、発掘調査の目的及び概要　　開発事業新農業構造改善事業中西条工区に先立ち300 ㎡以上を発掘調査して記録保存をはかる。遺跡における発掘作業は昭和63年10月15日までに終了する。調査報告書は昭和64年3月20日までに刊行するものとする。
5、調査の作業日数　　発掘作業12日　整理作業12日　合計24日
6、調査に要する費用　　発掘調査総額　2,000,000 円
　　文化財保護部負担額（30%）　600,000 円
　　農政部局負担額（70%）1,400,000円
7、調査報告書作成部数　　300 部

第2節　調査体制

団　長	小松　優一	（塩尻市教育長）
担当者	小林　康男	（日本考古学協会員、市教委）
調査員	鳥羽　嘉彦	（長野県考古学会員、市教委）
	市川二三夫	（長野県考古学会員）

参加者　赤津道子、小沢甲子郎、川上奈美江、小松義丸、小松静子、小松幸美、桜井洋子、高橋鳥億、高橋阿や子、高橋タケ子、手塚きくへ、中野やすみ、中村洋子、藤松謙一、松下おもと、村山　明、山口仲司、小松礼子、吉江みより、荒川与志夫、中村美咲彦、太田正子、古厩馨子、中村ふき子。

事務局	市教委総合文化センター所長	清水良次
	〃　文化教養担当課長	横山哲宜
	〃　文化教養担当副主幹	三澤　深
	〃　平出遺跡考古博物館館長	小林康男
	〃　平出遺跡考古博物館学芸員	鳥羽嘉彦

協力者	塩尻市中西条土地改良事業共同施行委員長・地権者		小沢　泉
	〃	副委員長・地権者	川窪忠道
	〃	副委員長・地権者	小沢平治
	〃	会計・地権者	中村孝治
	〃	委員	丸茂茂樹
	〃	委員	宮川典男
	地権者		小松　昭
	〃		宮川　弘

第3節　調査日誌

昭和63年9月27日(火) 曇のち雨　発掘調査開始。器材準備。調査区（トレンチ）の設定。Aトレンチより堀り下げ開始。午後、降雨のため午後作業中止。

9月28日（水）曇　Aトレンチ堀り下げ、ほぼ終了。ローム面まで浅く、出土遺物僅少。Bトレンチ堀り下げ、Aトレンチよりローム面まで深い。Cトレンチ堀り下げ開始。

9月29日（木）曇　Bトレンチ堀り下げ。Cトレンチ堀り下げ、中間地点で土器小片出土。馬骨の出土もある。

9月30日（金）雨　雨天中止。

10月1日（土）晴　Cトレンチ堀り下げ終了。中央部および西半部から著しい馬骨の出土。西端地点から網代底出土。Dトレンチ堀り下げ開始。

10月2日（日）定休日。

10月3日（月）晴　A．Bトレンチ、清掃、写真撮影、土層柱状図作成、平面図測図、埋め戻し。Cトレンチ、柱状図作成、平面図測図、Dトレンチ、第1号～3号住居址検出、堀り下げ。Eトレンチ堀り下げ。

10月4日（火）晴　Cトレンチ、写真撮影、埋め戻し。Dトレンチ、第1号～3号住居址セクション図化、床面精査。Eトレンチ堀り下げ。Fトレンチ、南側27m分のトレンチ設定。

10月5日（水）曇　Cトレンチ埋め戻し。Dトレンチ、第1号～3号住居址、写真撮影、平面図測図。トレンチ全体図測図、写真撮影、埋め戻し。E．Fトレンチ堀り下げ。降雨のため午後作業中止。

10月6日（木）雨　雨天中止。台風25号の影響。

10月7日（金）晴　Eトレンチ、写真撮影、平面図測図、埋め戻し。Fトレンチ堀り下げ、南端から15m位の所に土師器(坏、カメ)、縄文中期土器片多量に出土。Hトレンチ、北側から堀り下げ。

10月8日（土）　担当者の都合により作業休み。

10月9日（日）10日（月）　定休日。

10月11日（火）晴　Fトレンチ堀り下げ。Hトレンチ堀り下げ。遺跡遠景の写真撮影。

10月12日（水）曇のち雨　Fトレンチ、住居址の壁一部検出。第4号住居址とする。Hトレンチ堀り下げ。降雨のため午後作業中止。

10月13日（木）晴　Fトレンチ、平面図測図、柱状図作成。Gトレンチ、トレンチ設定、東側から堀り下げ。Hトレンチ堀り下げ、縄文土器、土師器の一括が数ヶ所で出土。風が強く寒い一日だった。

10月14日（金）快晴　Fトレンチ埋め戻し。Gトレンチ堀り下げ。Hトレンチ、第5号～7号住居址の床、壁を確認。第6号住居址の南側にまだ数軒の住居址存在。

10月15日（土）快晴　Gトレンチ、第8号住居址の平面図測図。Hトレンチ、住居址の遺物取り上げ。

10月16日（日）定休日。

10月17日（月）晴　Gトレンチ堀り下げ、中央部に住居址数軒検出。Hトレンチ、第5号～7号、第9号～11号住居址、セクション図化、平面図測図、写真撮影。トレンチ全体図作成。埋め戻し。

10月18日（火）小雨　Gトレンチ、第12号～14号住居址、平面図測図。Fトレンチ北側の堀り下げ開始。昼、降雨が激しくなったため作業中止。

10月19日（水）晴　Gトレンチ、第8号、12号～14号住居址、セクション図化。全体図作成、

写真撮影。Ｆトレンチ堀り下げ、中央付近から南側に落ち込みの存在。

10月20日（木）晴　Ｇトレンチ埋め戻し。Ｆトレンチ堀り下げ。

10月21日（金）曇　Ｆトレンチ、濠の平面図測図、写真撮影。全体図作成。器材片付、テント取り壊し、器材撤収。本日をもって現場作業を終了する。

整理作業は10月～２月、平出遺跡考古博物館において実施された。出土遺物の洗浄、註記、復元作業と同時に実測図の整理、製図、遺物の実測、図版作成。また、報告書の原稿執筆を行う。

第４節　遺跡の状況と面積

遺跡名	場　　所	現況	種類	全体面積	事業対象面　積	最低調査予定面積	調査面積	発掘経費
三嶽西	塩尻市大字中西条283-１番地外	果樹園	包蔵地	31,000㎡	390㎡	300㎡	318㎡	2,000,000円

第１表　発掘調査経過表

月 遺跡名	9	10	11～2	主　な　遺　構	主　な　遺　物
三嶽西	27 21 発掘		遺物整理 図面作成 原稿執筆	縄文時代中期住居址　7 平安時代住居址　7 濠　1	縄文時代　土器　石器 平安時代　土師器　須恵器

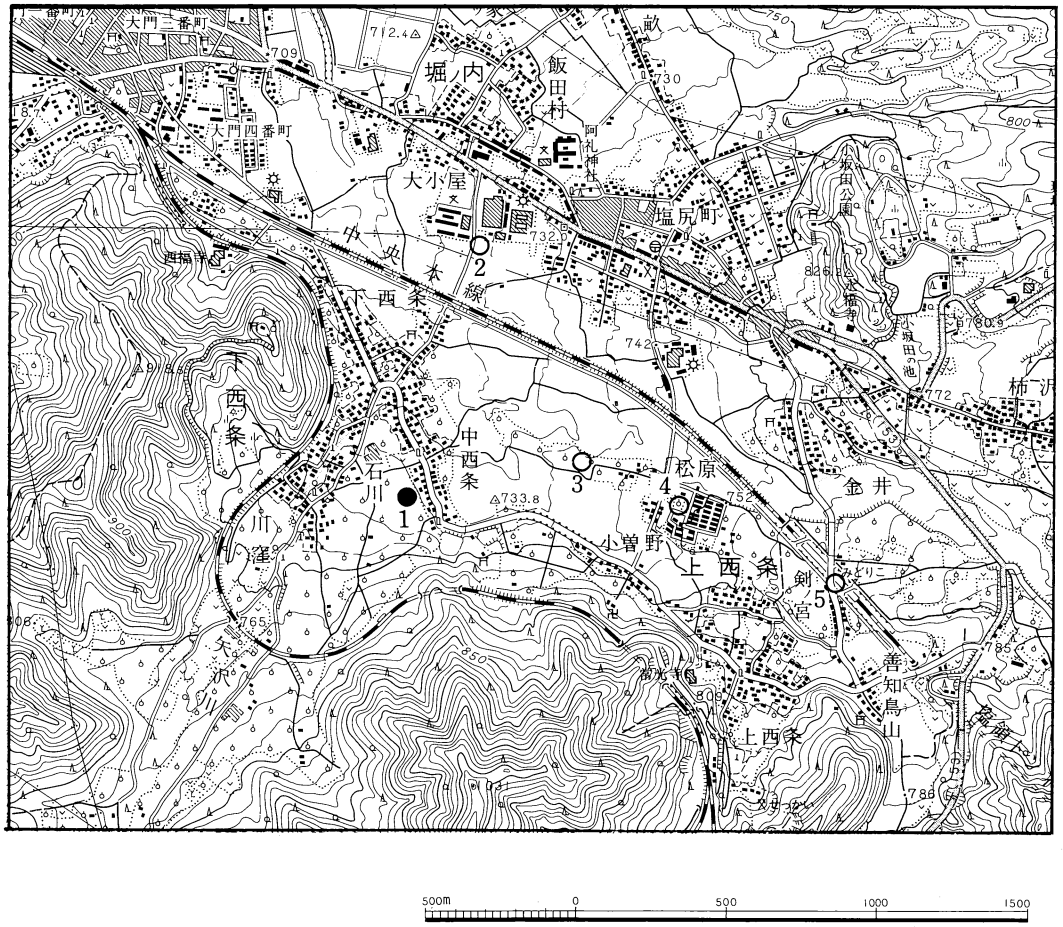
事務局

第II章　遺跡周辺の環境

第1節　自然環境

塩尻東地区は松本平の南東端に位置し、ＪＲ中央線と国道20号線が中央をほぼ東西に走っている。ここは中山道塩尻宿（現在の塩尻町）を中心として、古来より中山道、善光寺街道、三州街道を集め、交通の要衡地として繁栄してきた。

地形的にみると東側からは高ボッチ山塊の西麓斜面が、また南側からは善知鳥峠、大芝山に代表される中央アルプス北端の山麓斜面が迫っており、中央を東山に源を発し、塩尻市街地へ流下



1．三嶽西　2．砂田　3．田端川端　4．焼町　5．峯畑・剣ノ宮

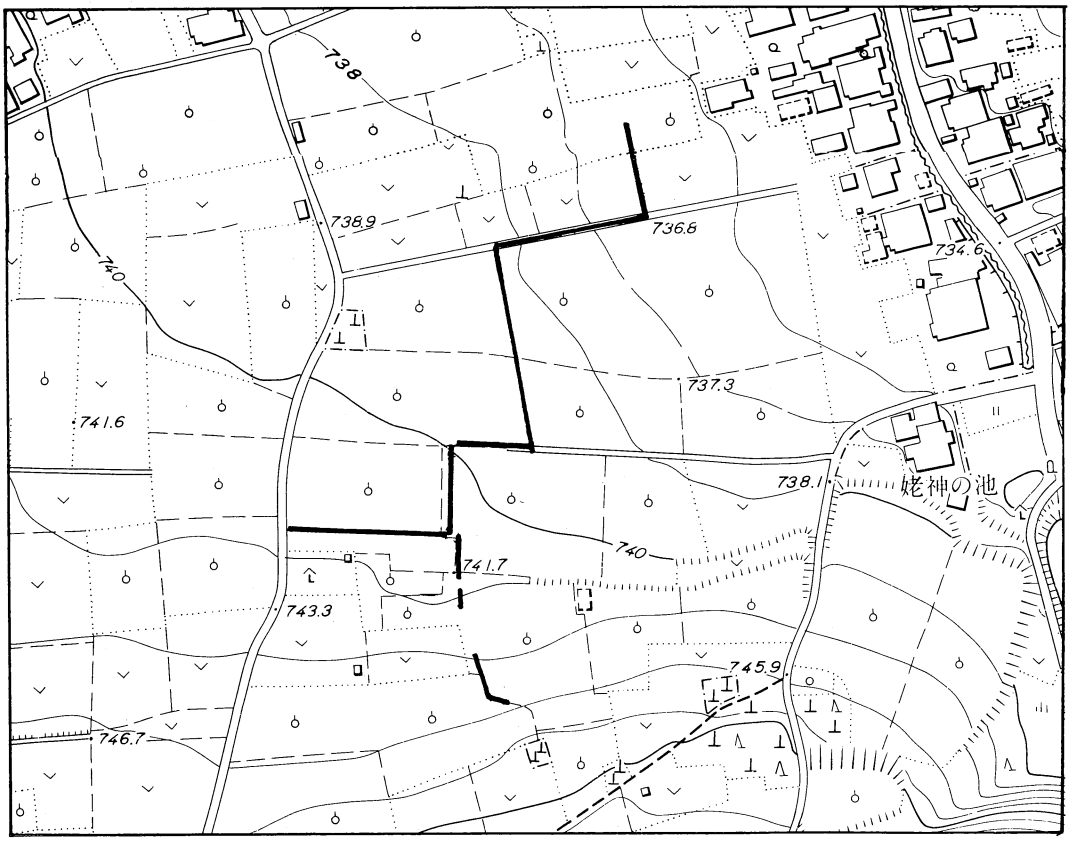
第1図　三嶽西遺跡位置図

する田川によって形成された扇状地形が発達している。扇状地は長さ4.5 km、幅2 kmの広大な規模を持ち、その扇端は下西条西福寺の付近から桟敷、入道部落に至る狭長な低窪地を挟んで桔梗ヶ原台地に連なっている。田川はここで権現沢川、四沢川、矢沢川などを集めながら下西条の北側で向きを北へ変え、松本平の東側を一直線に北流し奈良井川に合流している。

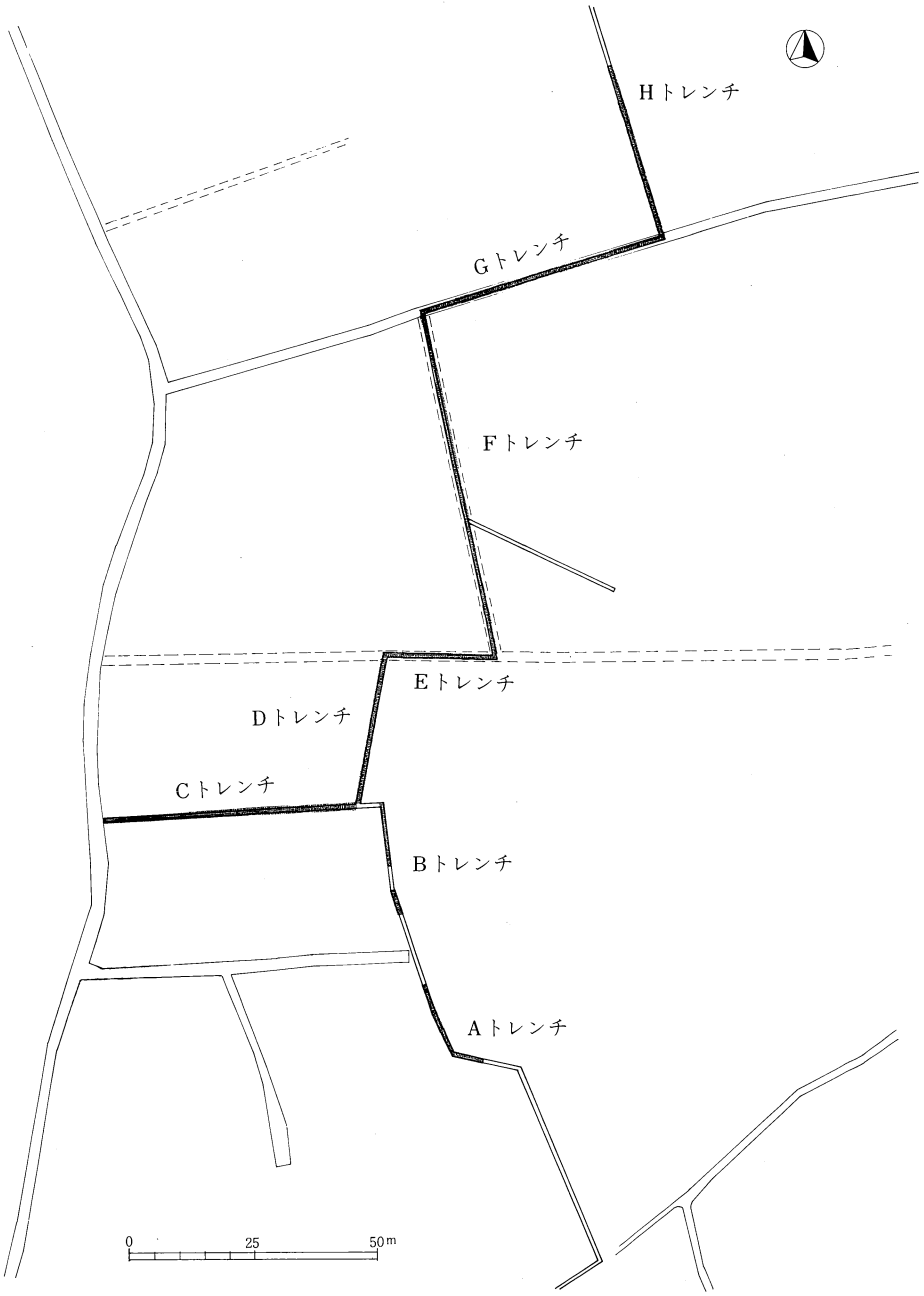
三嶽西遺跡はこの塩尻東地区の南側に位置する中西条区にあり、家並の裏手に広がるりんご園の中に展開している。ここは通称、「下条谷」の入り口に位置し、そこを流れ出る矢沢川に沿って形成された扇状地となっている。背後に山を背負うことからかなりの傾斜地となっているため、ひとたび大雨が降ると表流水が流れ易く、表土下の砂礫層の分布は著しい。

調査地区は南北230m、東西120mにわたる北東向き緩斜面に8本のトレンチを設定し、標高は最高位の南端で748m、最低位の北端で736mを測る。

なお遺跡名については従来、三嶽神社西遺跡、三岳西遺跡などの表記もみられたが、この機会に三嶽西遺跡に統一し、以後、この名称を用いることにした。



第2図　調査地区図



第3図　トレンチ設定図

第2節　周辺遺跡

今回発掘調査が実施された三嶽西遺跡は、田川の支流である矢沢川によって形成された扇状地上に展開している。この田川流域には先土器時代から中世にかけて数多くの遺跡が残されている。以下時代を追って遺跡を概観してみる。

先土器時代　青木沢で有舌尖頭器、禰の神で尖頭器、また柿沢で神子柴型尖頭器、掻器、石刃がそれぞれ出土しており田川上流域にはかなり濃密に該期遺跡の分布が認められる。

縄文時代　早期では八窪、向陽台、福沢でそれぞれ押型文期の住居址、集石が発見されている。前期は田川端、五輪堂で住居址、宗張で集石が発見されている。中期になると遺跡も急増し大規模な集落も発見されている。小坂田、中島、御堂垣外、柿沢東、五輪堂などが知られ、特に柿沢東遺跡では環状集落が確認されている。後期になると御堂垣外で住居址が4軒発見されたのみで、柿沢，ちんじゅでは土器片が採集されている。

弥生時代　初期の遺物が福沢、ちんじゅ、銭宮、砂田で出土している。後期になると住居址40軒が検出された田川端をはじめ、砂田、中島など田川沿いに遺跡が限定される。その他では久野井、西福寺前、銅鐸を出土した柴宮などが知られている。

古墳時代　禰ノ神、記常塚、銭宮と田川流域に5基の古墳が確認されており、小勢力がこの河川を中心に点在したことが伺える。該期の集落跡はまだ発見されていない。

奈良平安時代　奈良時代の遺跡はまだ見つかっていない。平安時代には田川端、高山城、栗木沢、樋口で住居址が発見されている。特に田川端では数多くの土器、鉄器類、墨書土器が発見されている。

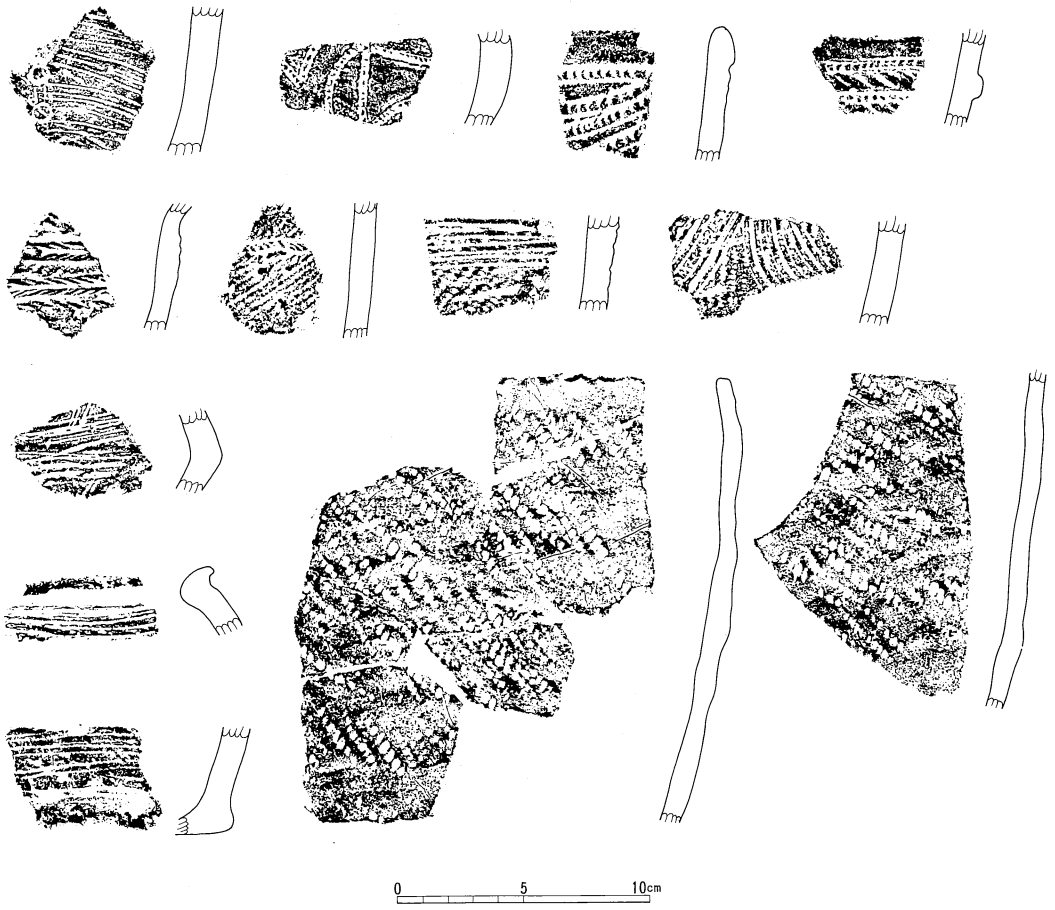
中世　中世に属する遺構も近年徐々に集積しつつある。中島の館跡、砂田の建物址、剣の宮の墓壙など多様な遺構が検出され、中世の解明も可能となりつつある。

第Ⅲ章　遺跡の概要

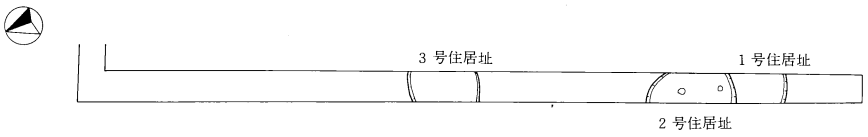
第１節　遺跡の概要

「三嶽西」遺跡は、昭和31年刊行の信濃史料第１巻上の遺跡地名表にその記載がある。そこには、山麓、丘陵に立地し、縄文時代前期末型式、打石斧、磨石斧、黒曜石片の出土が報じられている。

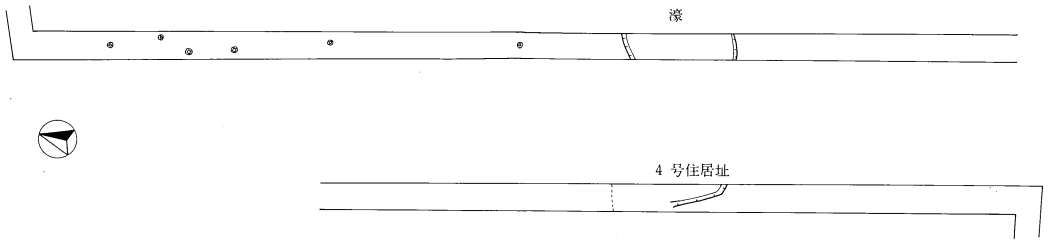
昭和53年７月５日、小沢謙文氏（市内中西条）が、三嶽神社西の台地上（姥が池の南、台地上）をリンゴ園に造成するために削平を行ったところ、土器類の出土があり、たまたま付近の石川秀雄氏（市内下西条）の注目するところとなり、遺物が採集された。そしてこの遺物が石川氏によって博物館に寄贈され、保管されている。第４図に示したものがその一部である。１、２は縄



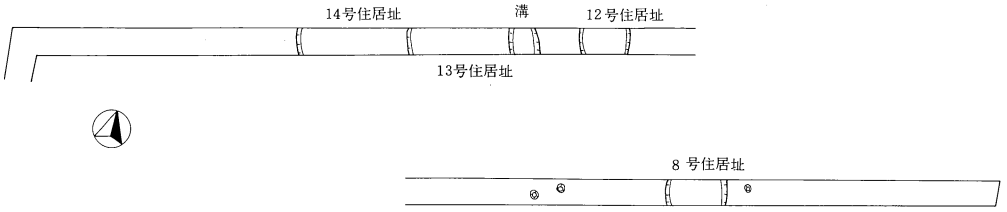
第４図　既出土器



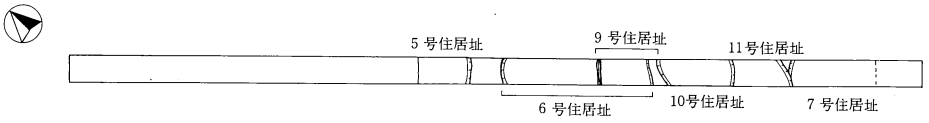
Dトレンチ



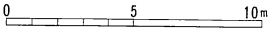
Fトレンチ



Gトレンチ



Hトレンチ



第５図　トレンチ全体図（遺構が検出されたトレンチ）

文前期諸磯ａ式、３～９は諸磯ｂである。12、13は同一個体で、薄手で堅い焼きである。関西系の影響を受けたものであろう。図示したもの以外に、有孔浅鉢形土器、打製石斧、磨石、凹石等が得られている。ここで採集された遺物は、信濃史料に記載された内容とほゞ一致しており、三嶽西遺跡を、縄文前期に属する遺跡と性格づける根拠となった。

今回の調査地区は、この昭和53年に遺物が採集された場所よりやや西方で、しかも台地から一段下がった地域である。今回の調査結果は、縄文前期の遺物は皆無で、縄文中期～中・近世の集落址であることを示したが、同一遺跡内で、時期ごとに占拠する地域が異なっていた可能性も考えられる。

調査は、配管の場所に沿って、幅１ｍのトレンチを設定して実施され、Ａ～Ｈトレンチ、全長318m、発掘調査面積318 ㎡にわたって行われた。

調査の結果、遺構には縄文時代中期住居址７、平安時代住居址７、濠１が検出され、これらの遺構に伴って縄文中期土器、石鏃、スクレイパー、打製石斧、土偶、弥生土器、石包丁、土師器坏、甕等、中世青磁の遺物が出土した。

遺構は、傾斜面のＡ・Ｂ・Ｃトレンチからは検出されず、平坦地となるＤ～Ｈトレンチにかけての地域から発見されている。Ｄトレンチから１、２、３号住居址、Ｆトレンチから４号住居址と濠、Ｇトレンチから８、12、13、14号住居址、そしてＨトレンチから５、６、７、９、10、11号の各住居址がそれぞれ発見された。特にＧ．Ｈトレンチでは遺構の密集度が高く、この付近が三嶽西遺跡の中心地域ということができよう。

遺物は、調査が１ｍのトレンチということもあり、各遺構とも僅少であった。しかし、縄文中期初頭の土器類、土偶、弥生時代の石包丁、平安時代の墨書土器等は注目された出土品である。

以上、今回の調査結果についてその概要を記した。

第２節　発掘区の設定

三嶽西遺跡は三嶽神社西側に広がる扇状地上に立地する。付近は緩く北東方向へ傾斜する斜面であるが、南側の山に近づくにつれて漸次勾配が急になり、傾斜方向もほぼ南北となる。ここはひとたび豪雨が降ると幾筋もの表流水が発生し、大量の表土を下方へ流し出すため表土が極めて薄く、遺跡の立地条件としては決して良好とは言えない。従って今回の調査では事業箇所のうち、地形的に下方（Ａトレンチ以北）に遺跡の可能性を伺い、調査対象とした。

調査は原則として管の埋設箇所全てを対象としたが、工事幅60㎝は発掘調査の堀り下げにやや支障があったため、両側を20㎝ずつ拡幅し、１ｍ幅のトレンチを設定した。トレンチは南からＡ～Ｈの８本のトレンチを設けたが、ＡトレンチとＢトレンチの間は道路によって，またＢトレンチ内には果樹園の支柱によって一部、未調査域とした部分がある。各トレンチの規模については次のとおりである。

Aトレンチ	20.8×1.0(m)
B トレンチ	4.7×0.8+11.8X0.7
C トレンチ	50.0×1.0
D トレンチ	30.0×1.0
E トレンチ	20.0×1.0
F トレンチ	68.0×1.0
G トレンチ	50.0×1.0
H トレンチ	33.5×1.0

発掘調査総面積は318 ㎡である。

第Ⅳ章　遺構・遺物

第1節　Aトレンチ

今回の発掘調査では最南端にあたり、最も山ぎわに位置する。ここは表土が極めて薄く、柱状図にみられるようにローム面までは最大でも30cmの深さを測るにすぎない。しかし土層は比較的整然と推積しており、撹乱がみられないところから自然推積土と思われる。おそらく傾斜の急勾配により降雨などで表土が流された地域と推察される。

遺物は覆土中から僅かに出土したが、遺構は検出されなかった。上述したような地形的制約から当時の生活空間がここまで及んでいなかったものだろう。

29図3の打製石斧は撥形で、刃部は円刃をなす。周縁のみに調整を施し、第一次剥離面を大きく残している。全面にわたって磨耗が著しい。

第2節　Bトレンチ

Aトレンチの延長上に位置する南北トレンチで、北端は東西方向のCトレンチに接続している。Aトレンチとの間15m は果樹園への侵入道路により切断され、またBトレンチも中央に棚の支柱があったため途中5mが途切れている。ローム面まではAトレンチに比べかなり深くなり、南側で70cm、北側で60cmを測る。地表の傾斜に比べロー ム面の傾斜がかり急なことを物語っている。またロー ム面自身もかなり起伏に富んでおり、流水の影響を受けたと推察される。A トレンチと同様に遺物は若干出土したが、遺構は検出されなかった。

第3節　Cトレンチ

Bトレンチ北端と調査地域西側を走る道路とを結ぶ長大な東西トレンチである。トレンチ内でのローム面は西へ傾斜しており、東側でローム面まで35cmを測るにすぎないが、西端では70cm厚となる。本トレンチにおいても遺物は僅かに出土したが、遺構は検出されなかった。

西端から20m 程東側へ入ったところにおいて地表下40cmの深さで礫群に混じって大量の骨が出土した。出土状況からみてかなり新しいものと思われたため地元の方に伺ったところ以前、牛馬の骨を大量に埋葬したことがわかり、場所を代えて葬ることとした。

出土遺物としては28図10、29図1の打製石斧、29図6の横刃形石器とが出土し、他に土器細片が得られている。10は打製石斧の頭部残欠片で、原石面を大きく残している。1は短冊形を呈し、刃部の一部分を欠失している。6の横刃形石器は、直刃で背面は山形をなす。土器は小片のため性格が判然としない。

第4節　Dトレンチ

Cトレンチ東端から北へ延びるトレンチであり、東西方向のEトレンチへ接続する。ローム面までの表土厚は30～40cmとほぼ一定の値をとる。局所的に支柱の穴跡と思われる撹乱がみられるが土層自体に著しい動きはみられず比較的整然としている。またローム面も流水等の影響は受けていない。

トレンチ堀り下げの段階で多量の土器片が出土し、すでに遺構の存在が伺えたが、ローム面で縄文時代中期の住居址3軒が検出された。

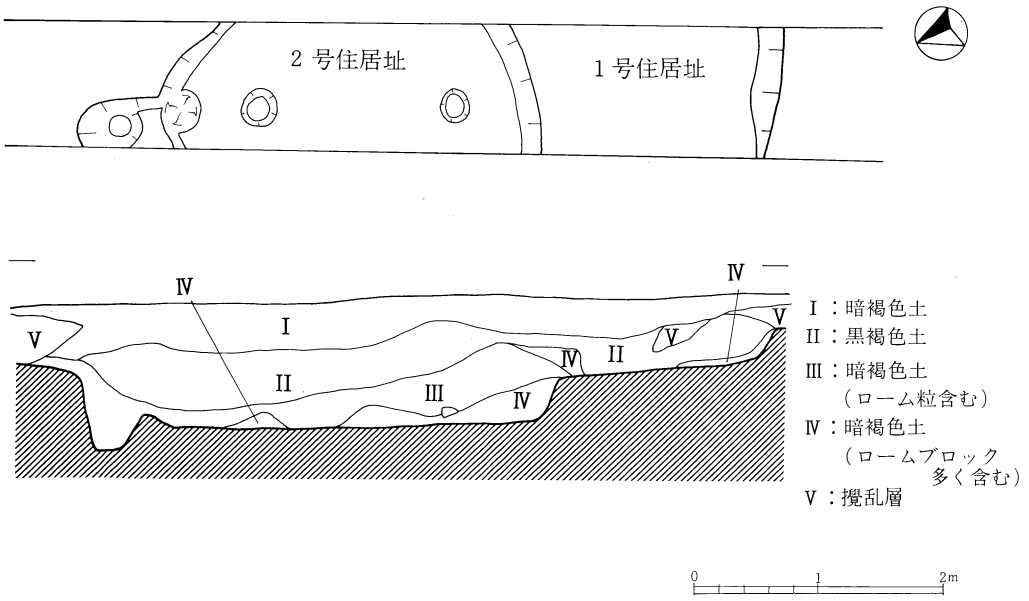
このうち第1号住居址と第2号住居址は南端から北へ3mの位置から出現し、後者が前者を掘り込みによって漸っている。また第3号住居址は第2号住居址北壁からさらに6m北側に位置する。

遺構外遺物としては、28図6 の打製石斧、29図5の横刃形石器が得られている。打製石斧は、短冊形で刃部を欠く。

原石面を残し周縁に大まかな加工を施している。横刃形石器は、直刃で、背面は台形を呈する。小形、薄手に作られている。

(1)　第1号住居址

北半分が第2号住居址によって漸られているため南半部のみ検出された。南壁のみの確認だったため形態、規模を把えることはできなかったが、壁の状況から隣接する第2号住居址よりもか



第6図　第1号、第2号住居址

なり大形のものと推察される。壁はほぼ垂直に掘り込まれた良好な面を有し、壁高は31cmを測る。床面はよく踏み固められており堅緻である。平坦面をなすが北側へ緩く傾斜しており、南壁下と第２号住居址南壁上面では16cmの比高差を測る。

出土遺物は僅少で図示できるものはない。

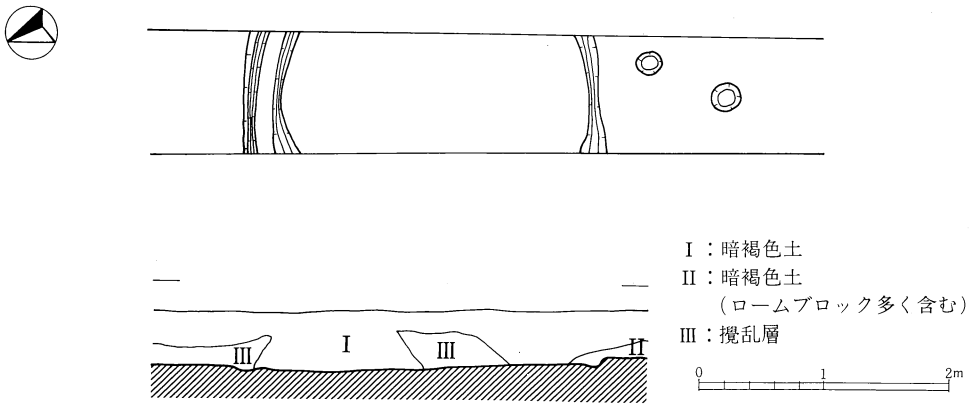
(2) 第２号住居址

第１号住居址の北側に位置し、掘り込んで重複している。南、北壁が確認されたが、確認部分が偏しているため正確な規模は判明しなかった。調査部分では、最大305 cmを測ることから、これ以上の径をもつ円形プランであろう。北壁で32cm、南壁で37cmの壁高をそれぞれもち、ほぼ垂直にきれいに掘り込まれている。床面は平坦、堅緻であるが、壁沿いは僅かに高くなっている。２基のピットが検出されたが、柱穴になるか否かはっきりしない。本址の北壁西寄りには深さ57 cmの小堅穴が穿たれているが、状況からみて本址の一部ともとれるものである。

本址出土の遺物は極めて微量で、縄文土器片がわずかに得られたにすぎない。図示可能なものは８図１～３の３片である。とも深鉢形口縁部破片で、１は口唇下に一条の沈線文を、２は交互刺突文と沈線文とを施し、３は隆線と平行沈線とを組み合わせている。いずれも中期に属する。

(3) 第３号住居址

住居址のほぼ中央にトレンチがかかった。壁は北壁が確認されたのみであったが、周溝の存在から、径290 cmを測る円形プランを呈すると推察される。また北壁沿いには同心円状に２本の周溝がみられるところから建て替えの可能性も考えられる。本址は検出面と床面が同レベルという特徴をもつが、これは同じトレンチ内の他の住居址の遺存状態から考えても壁が削平されたという可能性は薄く、むしろ平地住居と考えられる。床面はよく踏み固められており堅緻な面をもつ。



第７図　第３号住居址

周溝は北側の２本が浅くいずれも僅か２㎝の深さしかないが、南側のものは５㎝の深さをもつ。ピットは床面上にはないが、周溝の南側に深さ21㎝のものが２基ある。周囲の状況からみて本址に関連する可能性が強い。

出土遺物は僅少で図示できるものはない。

第５節　Ｅトレンチ

調査区全体のほぼ中央に位置し、Ｄトレンチ北端とＦトレンチ南端をつなぐ東西方向の短いトレンチである。堀り下げを始めた当初、土器片の出土量が多かったため遺構の存在が期待されたが、結局、遺構は検出されなかった。ローム面までの深さは60～70㎝とかなり深いものであり、下部にはおびただしい量の砂礫が堆積していた。ローム層上面は浸食による起伏が著しく、過去に相当量の氾濫があったものと推察されることから元々存在した遺構の破壊消滅があったことも十分に考えられよう。覆土中から出土した大量の遺物は南側からの流れ込みと思われる。

26図5 、6 の弥生土器片と27図3 のスクレイパーが出土している。弥生土器片は、櫛描波状文を施す。本遺跡での弥生土器の出土は、この２片のみであった。Ｈトレンチ出土の石包丁と関連しよう。

第６節　Ｆトレンチ

Ｅトレンチ東端とＧトレンチ西端をつなぐ南北トレンチであり、本調査区のなかでは68m と最長のトレンチである。ここはリンゴの搬出の都合から２回に調査が分かれ、南方から進めてきた調査に続いて本トレンチの南側28m が先に調査され、Ｈ．Ｇトレンチの調査終了後、最後に本トレンチの北側40m が調査された。

本トレンチは長大であるため土層にかなりの変化がみられる。南側12m はＥトレンチとほぼ同じ様相をもち、深さ70㎝にあるローム面はかなり礫質となっている。ところがそれから北側は部分的に礫質の箇所もみられるが概してきれいなローム質で、土層も整然と堆積している。おそらくトレンチに斜交する方向で幾筋かの流れが発生したものと思われる。

遺構はトレンチ南側から13ｍ 北側に第４号住居址が検出された他、北側でトレンチを直交する大型の濠とピット群が発見されている。

出土遺物は第４号住居址以南の覆土中から顕著に出土したが、それ以北では僅少であった。26図２の縄文中期土器、同７～９の土師器坏、甕、27図６、７のピエス・エスキーユ、28図１、２、29、図２の打製石斧、29図４の凹石が出土した。縄文土器２は、底部は破片で、竹管工具による縦位の沈線文が施文されている。中期初頭に位置づけられよう。土師器坏７、８は、ともに10世紀前半の年代が与えられる。打製石斧１は短冊形、２は揆形を呈する。

(1) 第4号住居址

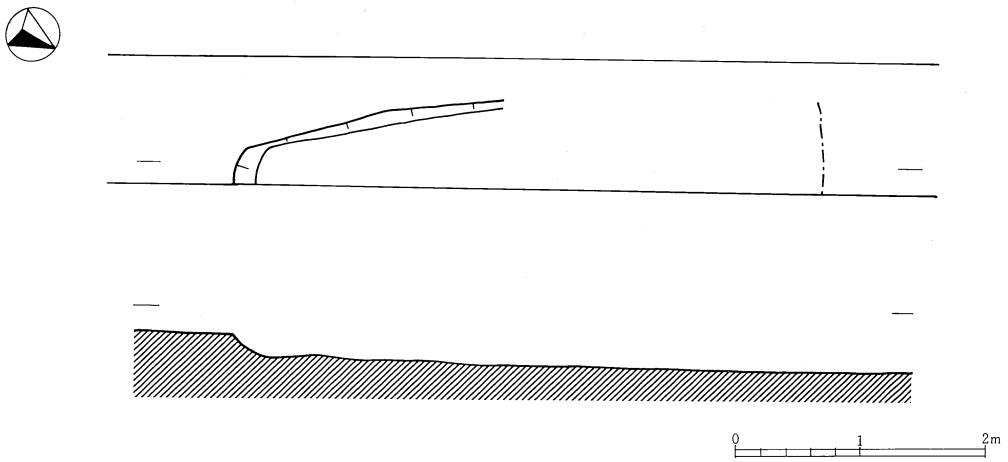
住居址の南壁のみが検出され、北側は立ち上がりを確認することができなかったため規模は不明である。遺存壁の在り方より推して隅丸方形もしくはそれに近い形態を呈するものと思われる。壁はかなりしっかりした立ち上がりをもつが壁高は17cmと浅く、西側で消滅している。床面は僅かに西へ傾斜しており、平坦であるが総じて締まっていない。北側でこの床の終わりが確認されたが立ち上がりが検出されず、北壁の位置を明らかにすることはできなかった。トレンチ内ではピット、炉などの施設は検出されなかった。

本址出土の遺物には、3片の縄文土器と土師器坏1とがある。土師器坏は覆土からの出土であり、混入と思われる。18図4は、口縁部破片。口唇下に平行沈線文を配し、その下位に三角印刻文と縄文を施文している。5、6は胴部破片で、縄文と縦位の沈線文の構成。4～6は、いずれも中期初頭九兵衛尾根式に該当しよう。混入と考えられる土師器坏7は、雄大な墨書をもつ。判読不明であるが、同様の墨書をもつものに6号住居出土の土師器坏がある。10世紀後半の所産である。

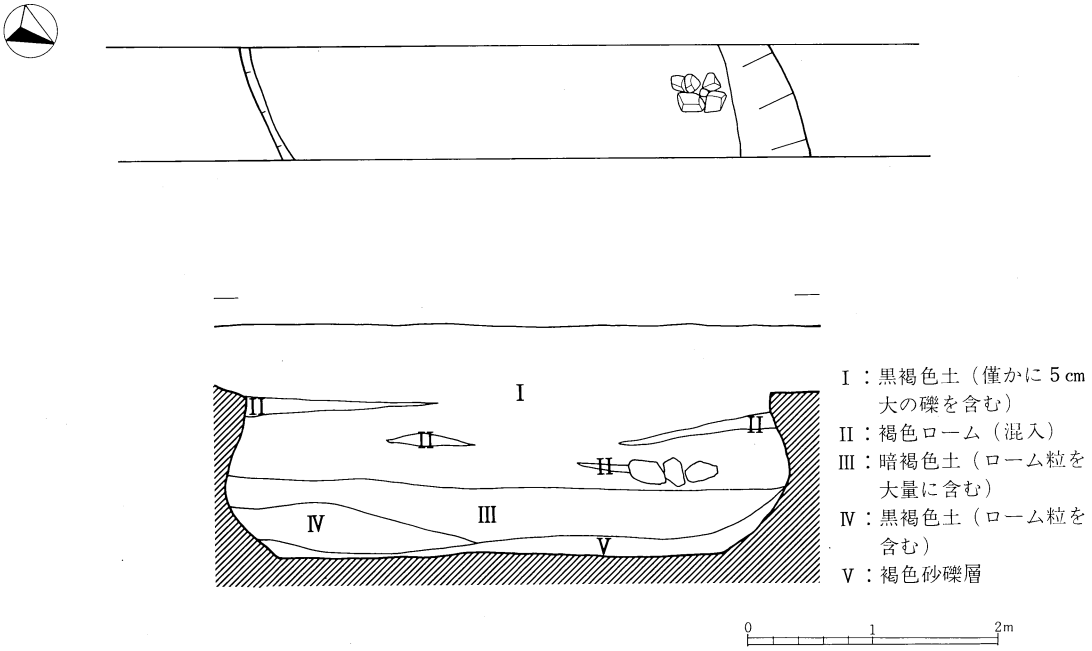
住居の時期は、縄文中期初頭と考えられる。

(2) 濠

トレンチにやや斜交する方向で検出された。幅は420 cmを測り、深さはローム層上面から130 cm、地表面から180 cmを測る。壁は胴張りの袋状となっており、また底は水平で平坦面をなしている。覆土中にはこの濠の性格を示すものは何ら発見できなかったが、第Ⅰ層の最下部付近から数個の角礫が出土した。出土状態から第Ⅲ層堆積後に投げ込まれたものと考えられる。本遺構については形態上、かなり興味深いものでったが、検出できたのが極一部であったため性格を把え



第8図　第4号住居址



第9図　濠

るまでにはいかなかった。しかし出土遺物より中世以降の何らかの濠であることは間違いないだろう。

第7節　Gトレンチ

Fトレンチ北端とHトレンチ南端に接続する東西方向のトレンチで、農道下に設定されたこともあり作業の困難をきたしたが、多くの成果を得た。本道路は調査前の表面踏査においてもかなりの黒曜石片が採集され期待されたが、調査の結果、縄文中期の住居址2軒、平安時代の住居址2軒が検出され、住居覆土を中心にして多量の土器類が出土した。

縄文時代の住居址は東端から13m のところに第8号住居址が、更にそれから13m のところに第12号住居址が存在し、その3m西側に平安時代の2軒、等13号住居址と第14号住居址が重複で存在する。

ここは表面がかなり礫質な土壌であるのに対し、地表下はほとんど礫がなく、塊状の暗褐色土と黒色土が堆積している。ローム面の深さはトレンチを通じて約50cmである。

出土遺物としては26図4の縄文中期土器片、27図1の石鏃、同4のスクレイパーがある。4は、平出IIIAの破片。石鏃1は、右辺のみの残欠品。4のスクレイパーは、全面にわたり加工が施され、ノッチ状の抉り込みが入れられている。

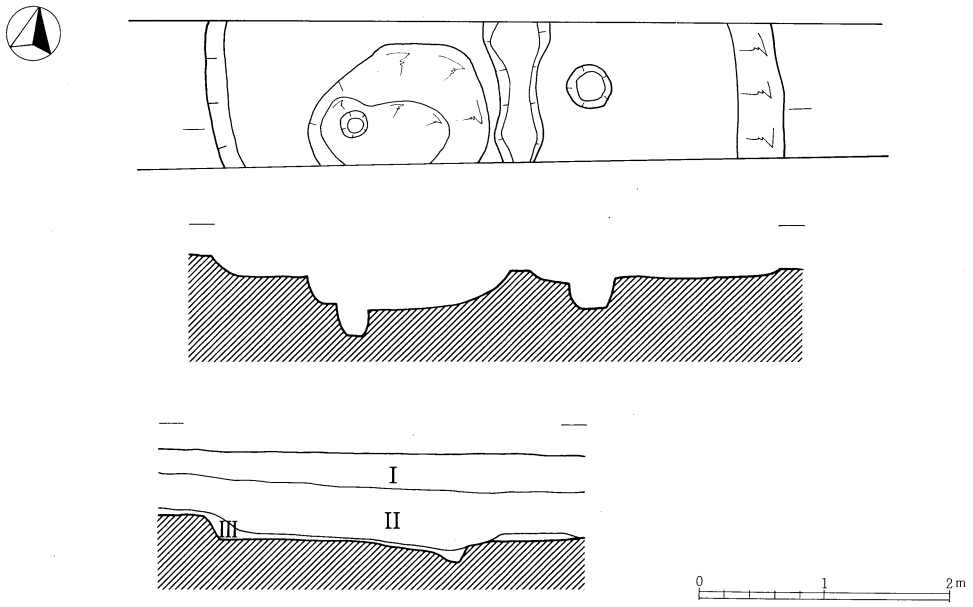
(1) 第8号住居址

掘り下げの過程では覆土中にかなりの縄文土器片が出土したが、本址の床面上では極僅かな出土にとどまった。プランは円形もしくは楕円形の平面形態を有し、東西の規模は270 cmを測る。掘り込みが礫層であったため遺構の遺存状態は悪いが、壁は明確に把えられた。西壁はほぼ垂直に掘り込まれており、壁高は15cmを測る。床面は平滑、堅緻であるが中央に大穴が穿たれている。また東端には焼土、炭を含むローム塊が細長く横たわっており、厚さ4～7cmを測る。形態、位置から何らかの内部施設と考えられる。

本址出土の遺物は、18図8、9の2片のみである。ともに縄文中期土器の胴部破片である。8は、隆帯と結節縄文を有し、9は沈行による格子文を施している。中期初頭に属するものである。

(2) 第12号住居址

第8号住居址と同様に砂利混じりのローム上に構築されている。トレンチ内では東壁と西壁が検出された。やや片側に偏しているためプランの形態、規模を推し測ることはできないが、確認規模では最大210 cmの径を測る。壁は東壁がほぼ垂直に掘り込まれ、西壁は緩く傾斜している。壁高はそれぞれ7 cm、14cmと比較的浅い。床面は礫質で起伏が著しい。ピットは西壁沿いに1基みられるが柱穴か否かは不明である。



第10図　第8号住居址

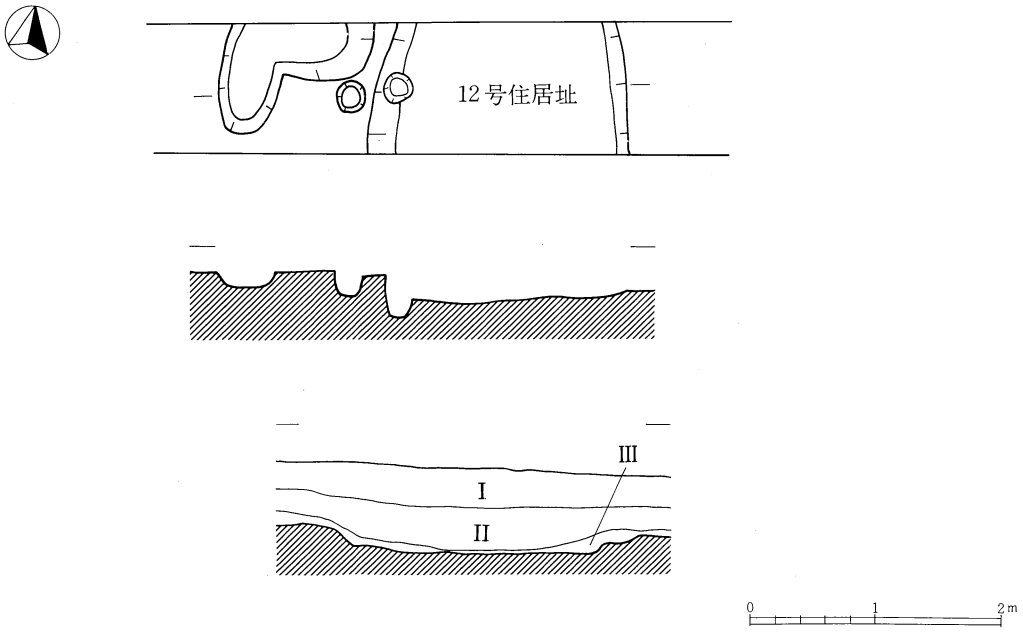
18図10、11の土器片と25図１～３の石器24図の土偶とがある。10は、底部破片で、底径9.3 cm条線文を施す。11も底部に近い部分の破片で、条線を有す。石器は、石鏃１、スクレイパーマがあり、石鏃は底辺への抉りの深いものである。

土偶は、住居床面から10cmほど浮いて一固まりになって出土した。４つの部位が一ヶ所から出土したが、それぞれバラバラに分割している。左手と胴部で、両脚、頭部、腹部、右手を欠いている。形態は、いわゆる出尻土偶である。４つの部分は、それぞれに粘土塊の接合面が観察され、両脚着根から胴中央まで芯棒が入れられた孔が存する。最近、問題になっている土偶の製作方法を知るうえでの好資料である。

本址出土の遺物は、中期後半と属する。

(3) 第13号住居址

西隣りの第14号住居址を堀り込みによって漸っており、また東側は小竪穴もしくは溝状の遺構によって漸られている。検出された規模は東西で420 cmを測る。西壁はほぼ垂直に堀り込まれており、壁高は17cmを測る。床面は平坦でよく踏み固められ堅緻である。部分的に砂利質な層が顔



第11図　第12号住居址

を覗かせている。東端に礫を伴う焼土がみられ石組み粘土カマドの崩壊したものと考えられる。焼土は厚さ16cmを測り、よく焼けているが、掘り込みはみられない。

本址の出土遺物は僅少で図示できるものはなかった。

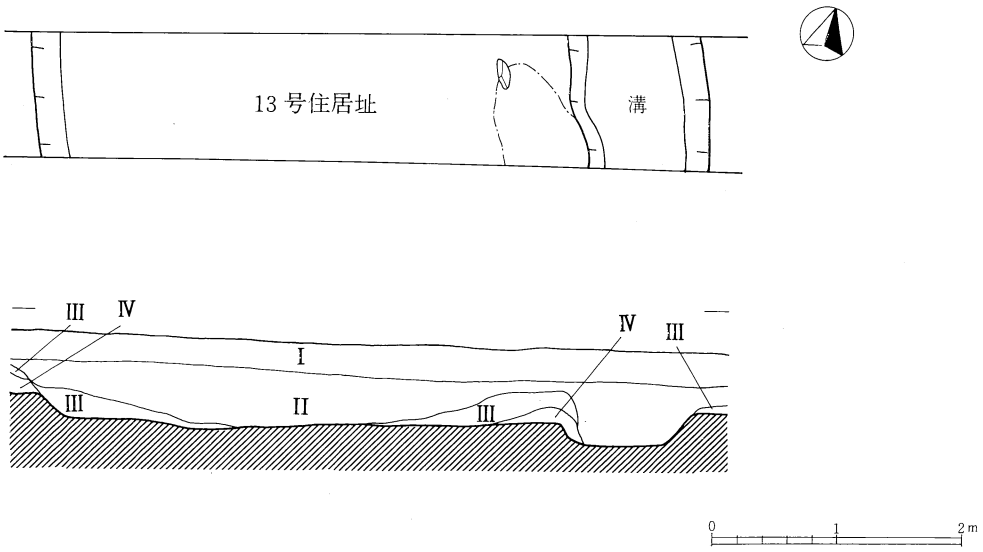
(4) 第14号住居址

東側を第13号住居址によって漸られているが、カマドの位置からほぼ全容に近い検出と思われる。両者の床面は26cmの比高差で本址が高い。西壁はほぼ垂直に掘り込まれ壁高は11cmを測る。床はよく踏み固められており、平坦であるが若干東側へ傾斜している。カマドは東端にあり石組み粘土カマドと思われる。焼土は15cmの厚さをもちよく焼けている。ピットは床面上に2基検出され、配置から主柱穴と考えられる。深さは15cmと17cmである。また西壁下には周溝の一部が検出されたが、深さ1cmと極めて浅いものである。

土器片と石器が出土しているが、極めて少ない。土器片は、18図12、13に示したが、磨耗が著しい。縄文中期後半に位置づけられよう。石器は、25図4に示したもので、石鏃の破損品であろう。

第8節　Hトレンチ

調査区の最北端に位置し、南端にGトレンチが接続している。本トレンチもGトレンチと同様に多数の遺構が検出されたところから、付近が遺跡の中心に位置するものと思われる。調査の結果は、縄文中期の住居址1軒と平安時代の住居址5軒が検出され、覆土中から多量の遺物が出土した。とりわけ縄文中期の第7号住居址は出土遺物が多く、特異的な産状を呈している。



第12図　第13号住居址

第７号住居址はトレンチ南端に位置し、また平安時代の第６号、第９号、第10号、第11号住居址はその北側に重複して１つの長い落ち込みを形成している。第５号住居址は更に北隣りに南壁のみ遺存させており、本調査では最北端の遺構となる。

土層はＧトレンチと同様に表面は礫質であるが、地表下は整然としており、第Ｉ層および第II層が撹乱せず堆積している。

遺構外出土遺物としては、26図１、３縄文土器、図２の石鏃、同５のスクレイパーがある。縄文土器１は、口径31cmを測る大形深鉢の口辺部で、隆帯を横位に巡らせ、その下位には竹管工具による縦方向の沈線文を施している。３は、大形深鉢の胴部で、縄文地文に沈線を加えている。中期初頭に位置づけられよう。

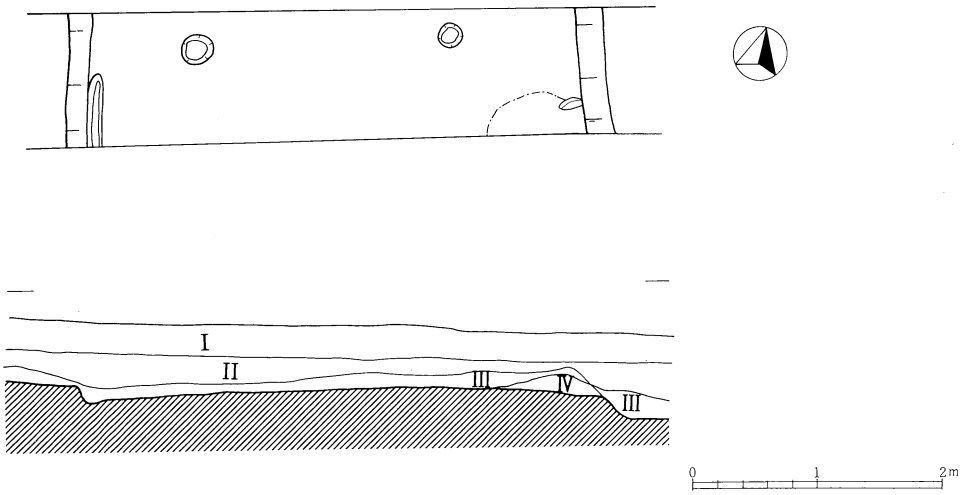
図示したもののほかに、13世紀に位置づけられる龍泉窯系青磁椀の破片があり、間弁をもつ鎬蓮弁文を施している。

Ｈトレンチは、遺構も多く、遺構外からの出土遺物も最も多かった。このトレンチ周辺が本遺跡の中心部であることを示していよう。

(1) 第５号住居址

北半部が崩壊し流れているため南半部のみの検出となった。南壁は礫質であるがほぼ垂直に掘り込まれており、壁高は14cmを測る。検出された部分ではやや変曲した形態を呈しているが全体のプランは把えられない。床面も壁面と同様に礫質であり、凹凸の少ない堅緻な面を有している。北側は床面が崩壊しており比高差20cmの段差となっている。トレンチ内では床面上にピットなどの施設は一際検出されなかったが、南壁沿いに土師器の甕が伏せるように出土している。

本址からは、19図に示した土師器坏、甕が出土した。１つは、底面に回転糸切り痕を持ち、２は黒色処理されている。３はほゞ完形に復元をされて、土師器甕で、口径17.2、器高22.9cmを測



第13図　第14号住居址

る。外面は、全面にわたって刷毛目成形されている。上半部は縦位に、底部周辺は横位の刷毛目が著しい内面も上半部は横位の刷毛目痕が顕著にみられる。

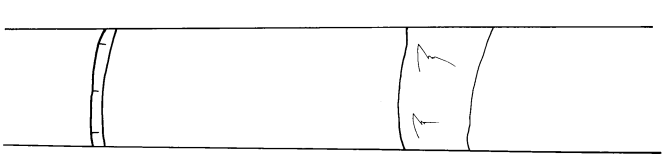
本址出土の土師器類は、10世紀前半に位置づけられる。

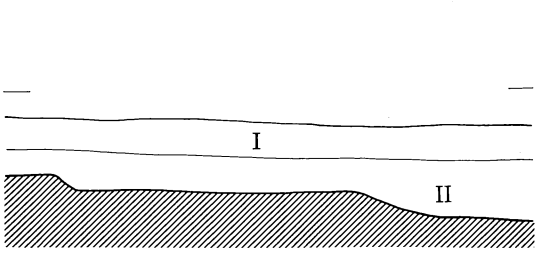
(2) 第6号住居址

第5号住居址の南側に隣接し、4軒が漸り合いで重複する遺構群の最北端に位置する。南側は第9号住居址が貼床し重複しているため、周溝こそ残るが床面と南壁は消滅している。北壁から南側の周溝までは590 cmを測り、壁の状況からほぼこれが住居址の径に相当すると考えられる。床面はやや起伏がみられるが概してタタキの堅緻な面を有している。ピットは第9号住居址のものと重複しており明確ではなく、また中央北寄りにみられる擂鉢状のピットも耕作により形成された穴の可能性が強い。北壁はほぼ垂直に掘り込まれており凹凸の少ないきれいなローム質からなり、北隣りの第5号住居址の礫質の壁とはかなり様相を異にする。周溝は幅20cm、深さ12～15cmを深るが、第9号住居址構築時にやや削られた可能性もある。

本址からは、土師器坏、甕、灰細陶器皿が出土した。土師器坏20図1は、外方に鋭く張り出した高台を有し、底部から口縁部にまでかかる筆太の墨書がなされている。墨書自体は、判読不明であるが、4号住居址覆土から出土したものと器形、字体は全く一致している。土師器甕4は、胴下半部で、外面に縦方向の刷毛目調整痕がみられる。灰細陶器3は、完形で出土。体部の一部に煤の付着が認められる。

本址出土の遺物は、10世紀後半の年代が与えられる。





Ⅰ：暗褐色土（やや礫を含む）
Ⅱ：黒褐色土
Ⅲ：茶褐色土（礫を大量に含む）
Ⅳ：ローム（二次堆積のブロック）
Ⅴ：暗黄褐色土
Ⅵ：黒色土
Ⅶ：暗黄褐色土（ローム粒を多量に含む）
Ⅷ：黒　　土

0　1　2m

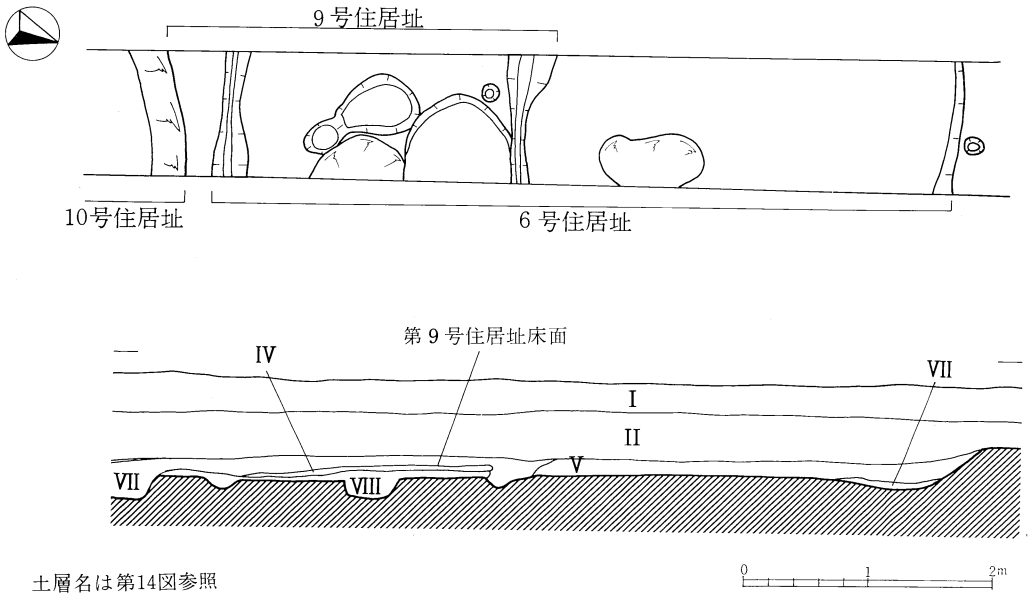
第14図　第5号住居址

(3) 第７号住居址

Ｈトレンチの南端に位置し、北側には第11号住居址が接している。北壁は検出されたが、南側は砂利層によって床面が消滅しており、局地的な水流があったことを物語っている。このため住居址の規模は明らかにできない。また本址は遺物の出土状況が非常に顕著であったが、砂利層の部分に関してとやはり遺物も僅少であった。北壁は第11号住居址によって一部漸られているが、残存壁はほぼ垂直に堀り込まれた良好な面をもつ。壁高は19cmを測る。床面は良く踏み固められており堅緻である。床面上にはピットが１基検出され、深さは８cm浅い。他に周溝、炉等の施設は確認されなかった。

本址は、今回の調査住居中、最も豊富な遺物を出土した住居である。出土土器は、21図２、３、４、５、７～９のように平縁のものを６のように山形のもの、をして１のようにわずかに山形を呈するものとがあり、外交するものと、内屈するものとがある。口縁部文様は、口唇下に縄文を施し、その下位に平行沈線文を配するものが一般である。胴部文様は、10、12、13のように隆帯が垂下し、縄文と沈線文とが組合わせられるものを、11、17のように沈線文の区画に縄文を施文したものが体をなす。また、22図６、７のような結節縄文も量的には覆い。石器は、石鏃、スクレイパー、打製石斧がある。石鏃は２点出土し、ともに長身で、底辺への扶りも深く、鋭利である。打製石斧は５点出土し、全し短冊形を呈する。23図１～３、５は、原石面を残す。
１～３は、円刃を呈す。１、２は、ともに刃部を中心に磨耗痕が認められる。

本址出土の遺物は、縄文中期九兵衛尾根II式に比定できよう。



第15図　第６号、第９号住居址

(4) 第9号住居址

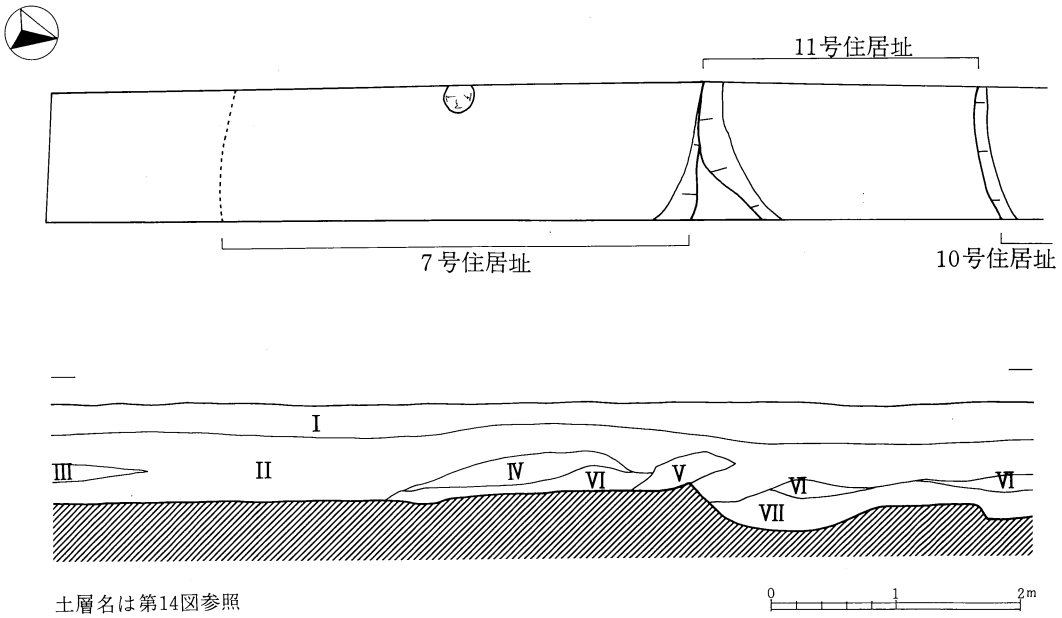
北側の第6号住居址には貼床で重複し、また南側の第10号住居址には掘り込みで漸られている。小規模の範囲で重複が著しいため遺構は複雑にみえるが、本址は北半部の床面と北側の周溝のみが残存する。本址独自の床面は第6号住居址周溝の南側に僅かに残るが、よく踏み固められた平坦面をなしている。第6号住居址の上に貼られた貼床部についても島状に僅かに残るだけであるが、ローム面の上に同様のロームを貼って構築しており肉眼での区別は付けにくい。厚さは8cmを測る。周溝は西側がやや緩く、東側は急勾配をなす。深さは10cmを測る。

遺物の出土はみられなかった。

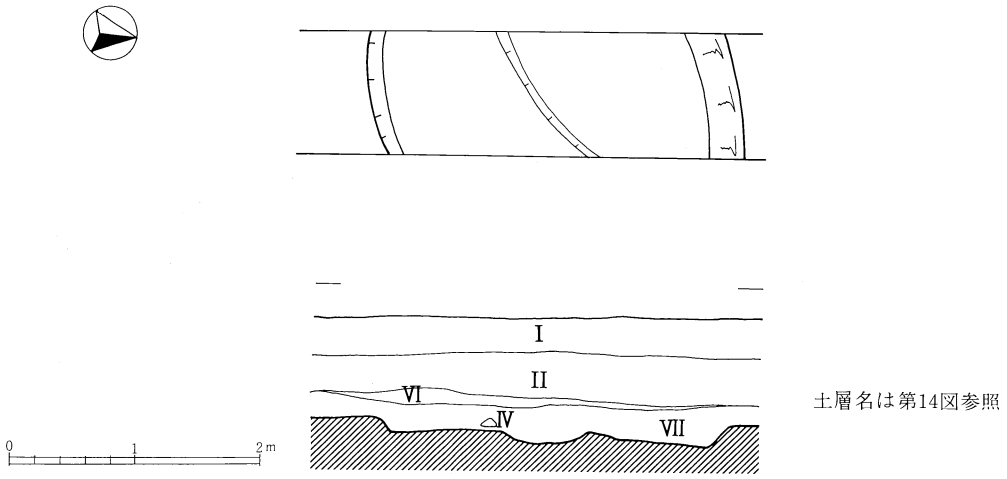
(5) 第10号住居址

北隣りの第9号住居址および南隣りの第11号住居址をそれぞれ掘り込みで漸っている。トレンチ方向で280 cmと小形の規模を測るが、検出された壁の方向はトレンチに斜交しており、より大きな規模が推察される。壁は北壁がやや傾斜のある掘り込みで壁高11cmを測るのに対し、南壁はほぼ垂直に掘り込まれており壁高は12cmを測る。床面は南半部が堅く締まっており平滑な面を残している。また北半部は落差19cmで小堅穴状の形態をとり、丸底で柔らかい面となる。

遺物の出土はみられなかった。



第16図　第7号、第11号住居址

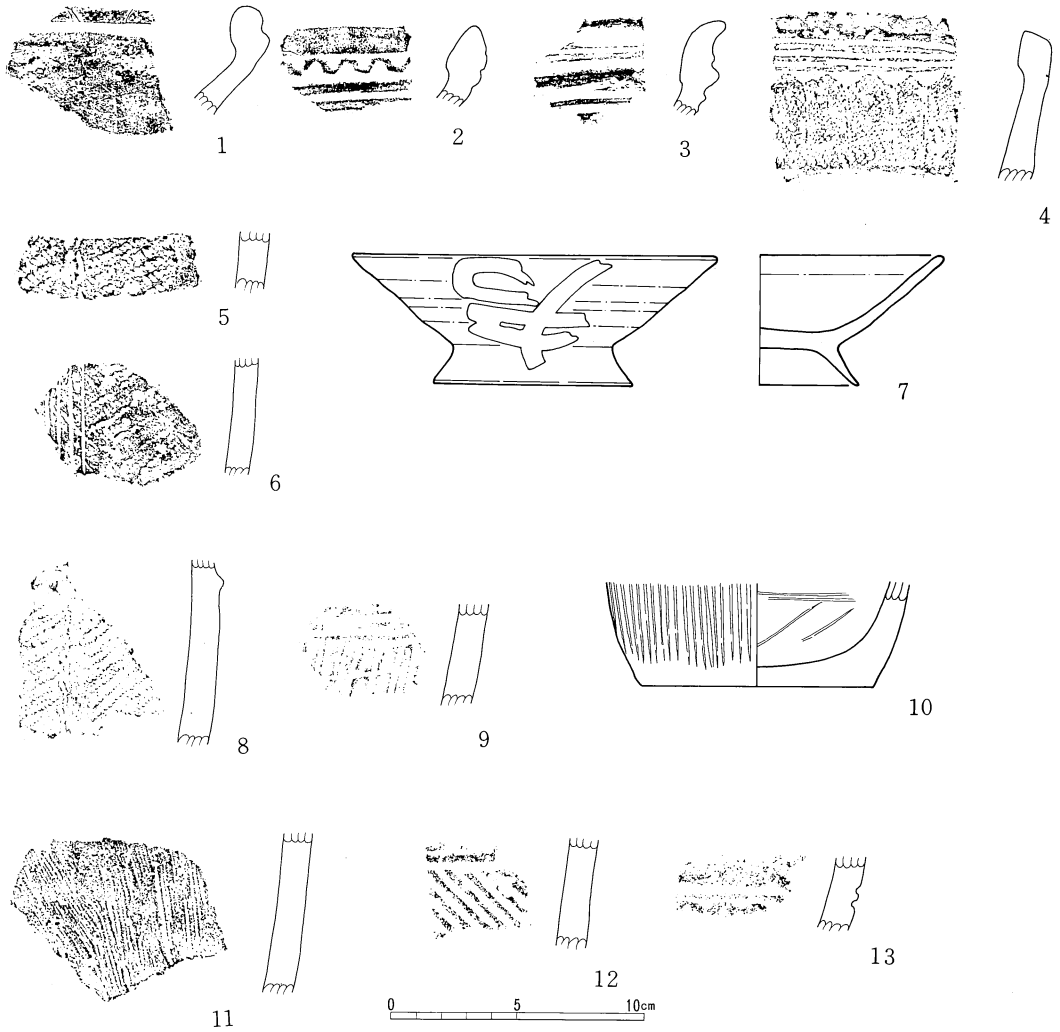


第17図　第10号住居址

(6)　第11号住居址

第７号住居址とは壁面で重複し、一部漸っており、また北隣りの第10号住居には掘り込みによって漸られている。壁は凹凸の少ない面でほぼ垂直に掘られている。壁高は36cmを測る。床は堅く締り平滑であるが、南側へかなりの勾配で傾斜しており、確認された床面で最大比高差18cmを測る。

遺物の出土はみられなかった。



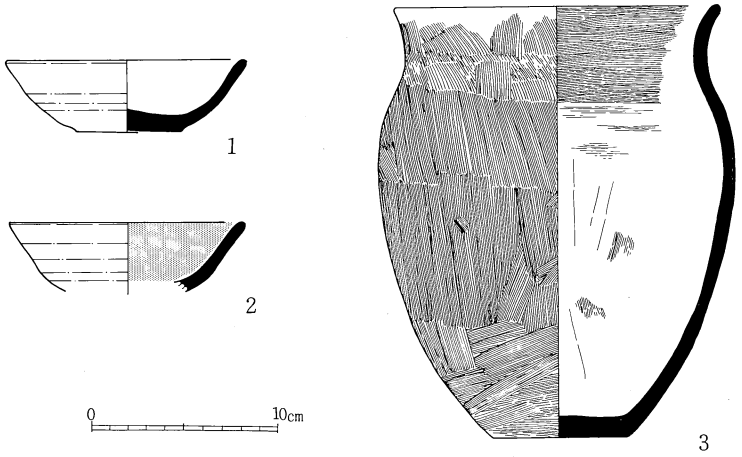
第18図　第２、４、８、12、14号住居址出土土器

土　器　観　察　表

番号	発　掘　区	器形	部位	文様構成要素	器面調整　外面／内面	胎　土	備　考
1	2 H	深鉢	口縁	沈線	ナデ／ナデ		
2	〃	〃	〃	沈線刺突	〃		
3	〃	〃	〃	〃	〃		
4	4 H	〃	〃	沈線縄文			
5	〃	〃	胴	縄文			
6	〃	〃	〃	縄文沈線			
8	8 H	〃	〃	〃			
9	〃	〃	〃	沈線			
10	12H	〃	底部	〃			
11	〃	〃	胴	〃			
12	14H	〃	〃	〃			
13	〃	〃	〃	〃			

土　器　観　察　表

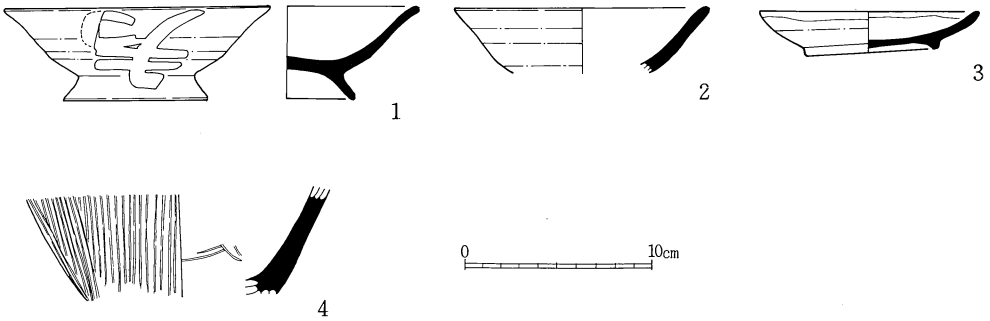
番号	発掘区	種別	器種	法　径（cm）			色　調		焼成	成形調整方法		備　考
				口径	底径	器高	内	外		外　面	内　面	
7	4 H	土師	杯	145	79	52	黄褐色	黄褐色	良	ロクロナデ	ロクロナデ	墨書



第19図　第５号住居址出土土器

土　器　観　察　表

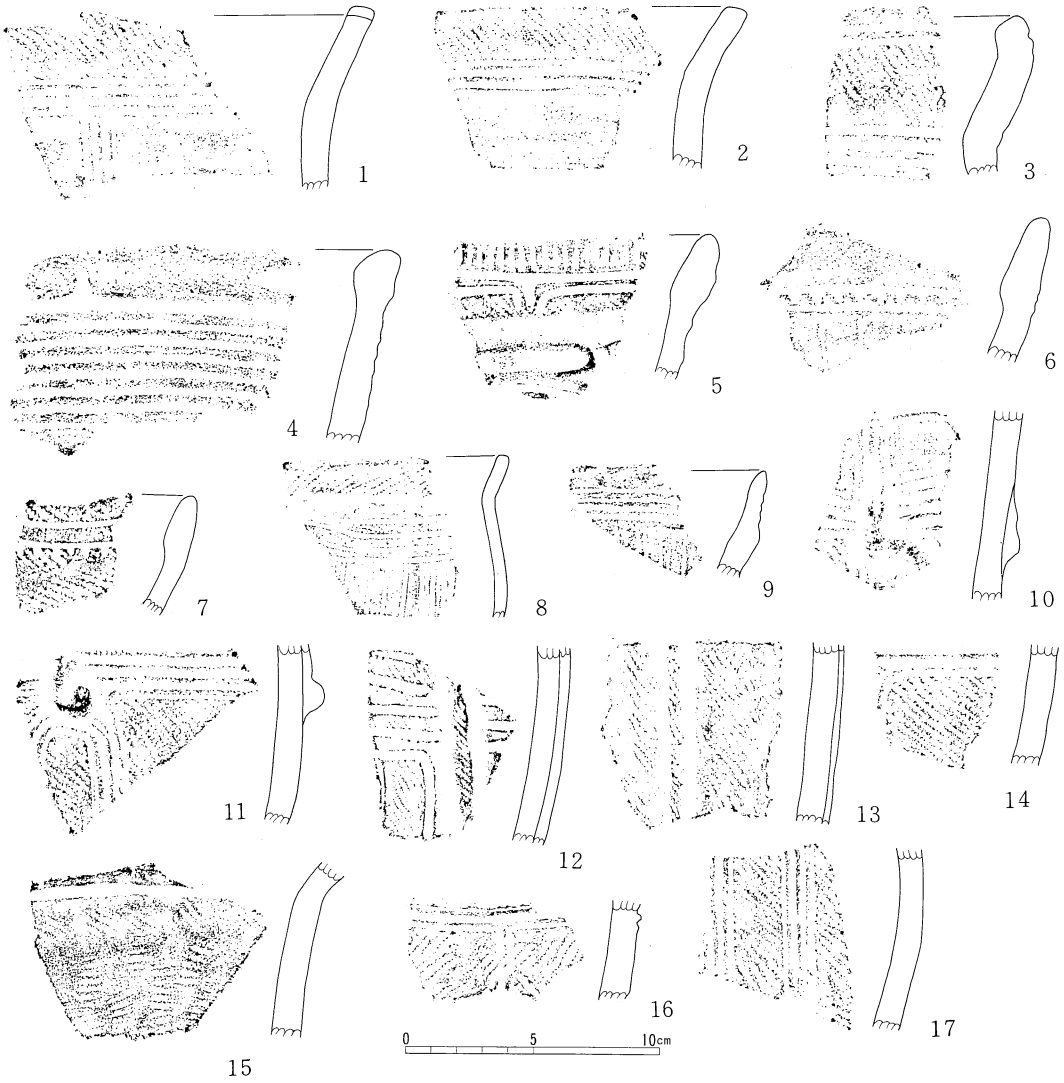
番号	発掘区	種別	器種	法径 (mm)			色調		構成	成形調整方法		備考
				口径	底径	器高	内	外		外面	内面	
1	5 H	土師	坏	130	60	39	暗褐色	暗褐色	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
2	〃	〃	〃	125	—	—	黒	〃	〃	〃	〃	
3	〃	〃	甕	172	70	229	暗褐色	〃	〃	刷毛目	刷毛目	



第20図　第６号住居址出土土器

土　器　観　察　表

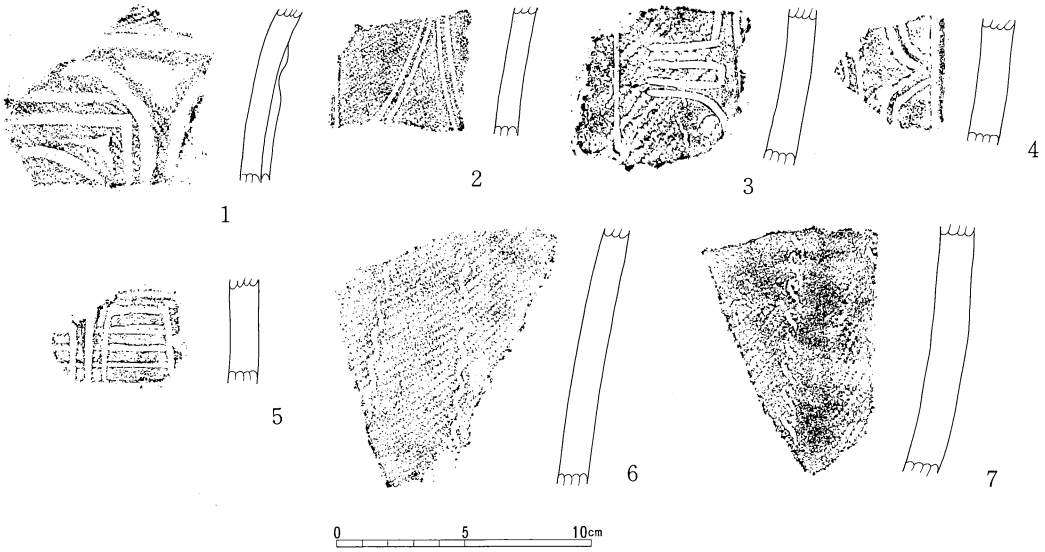
番号	発掘区	種別	器種	法径 (mm)			色調		焼成	成形調整方法		備考
				口径	底径	器高	内	外		外面面	内面	
1	6 H			140	76	50	黄褐色	黄褐色				
2	〃			135	—	—	〃	〃				
3	〃	灰釉		115	70	22	暗灰白色	暗灰白色				
4	〃	土師	甕	—	—	—	褐色	褐色	良好			



第21図　第７号住居址出土土器(1)

土　器　観　察　表

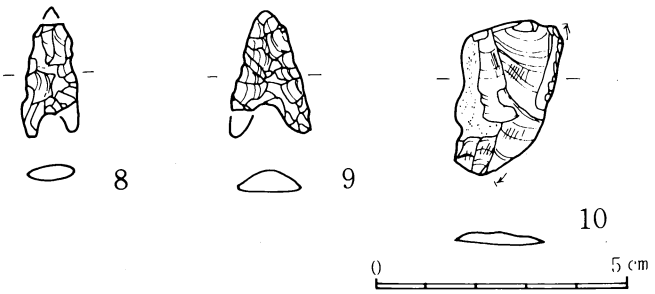
番号	発　掘　区	器形	部位	文様構成要素	器面調整　外面／内面	胎　土	備　考
1	７Ｈ	深鉢	口縁	縄文沈線			
2	〃	〃	〃	〃			
3	〃	〃	〃	〃			
4	〃	〃	〃	〃			
5	〃	〃	〃	〃			
6	〃	〃	〃	縄文刺突			
7	〃	〃	〃	〃			
8	〃	〃	〃	縄文沈線			
9	〃	〃	〃	〃			
10	〃	〃	胴	縄文隆帯			
11	〃	〃	〃	〃			
12	〃	〃	〃	〃			
13	〃	〃	〃	〃			
14	〃	〃	〃	〃			
15	〃	〃	〃	〃			
16	〃	〃	〃	〃			
17	〃	〃	〃	〃			



第22図　第７号住居址出土土器(2)、石器(1)

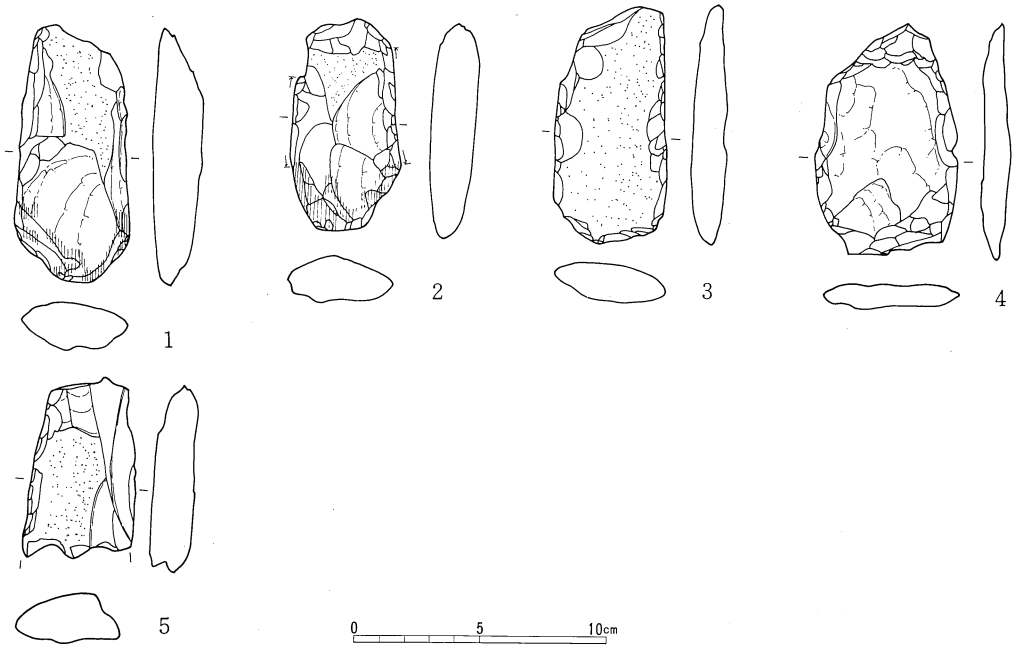
土　器　観　察　表

番号	発　掘　区	器形	部位	文様構成要素	器面調整　外面／内面	胎　　土	備　　考
1	７Ｈ	深鉢	胴部	縄文沈線			
2	〃	〃	〃	〃			
3	〃	〃	〃	〃			
4	〃	〃	〃	〃			
5	〃	〃	〃	〃			
6	〃	〃	〃	縄文			
7	〃	〃	〃	〃			



石　器　観　察　表

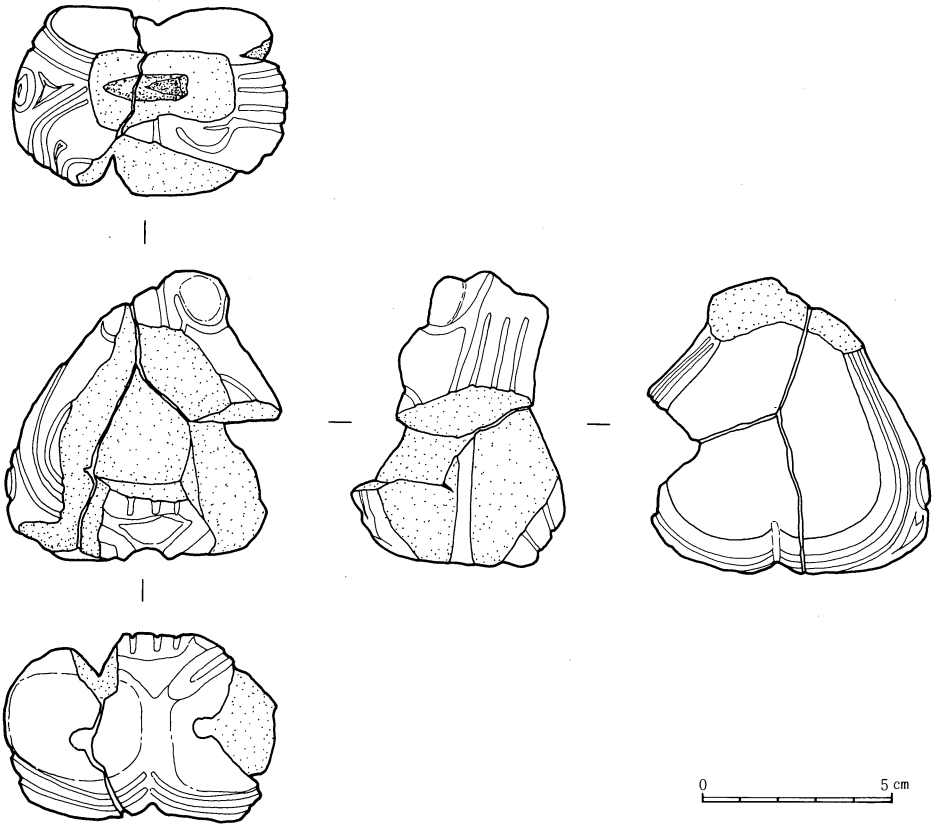
番号	発掘区	種　別	石　質	長さ(mm)	巾　(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特　徴
8	７Ｈ	石鏃	黒曜石	22	11	3	0.8	
9	〃	〃	〃	20	15	5	1.1	
10	〃	スクレイパー	〃	30	20	2	2.1	



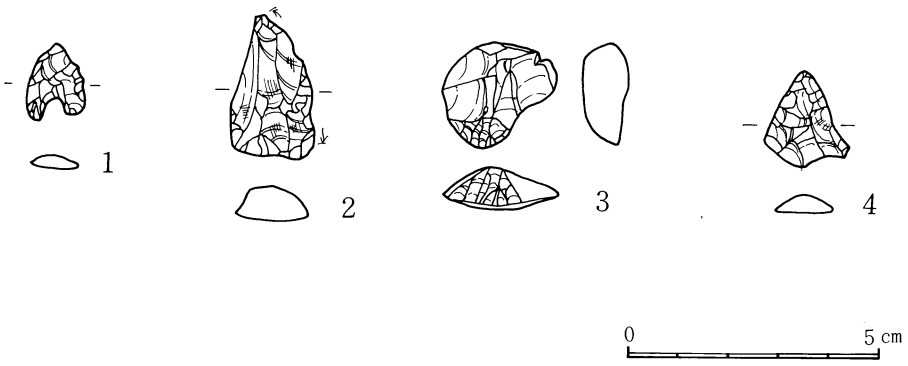
第23図　第７号住居址出土石器(1)

石　器　観　察　表

番号	発掘区	種　別	石　質	長さ(mm)	巾　(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特　徴
1	７Ｈ	打製石斧	頁岩	102	47	20	98	
2	〃	〃	〃	85	45	17	84	
3	〃	〃	〃	95	45	14	71	
4	〃	〃	硬砂岩	93	57	10	56	
5	〃	〃	硅質頁岩	74	44	17	59	



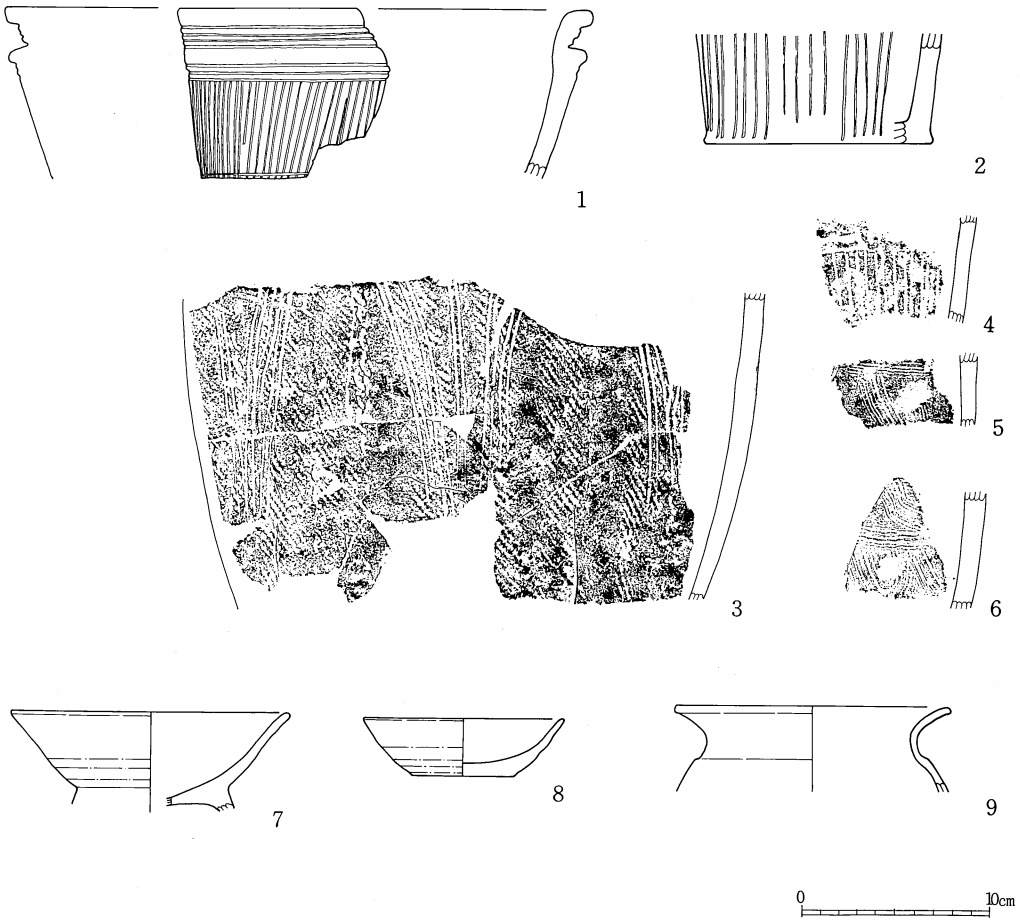
第24図　第12号住居址出土土偶



第25図　第12、14号住居址出土石器

石　器　観　察　表

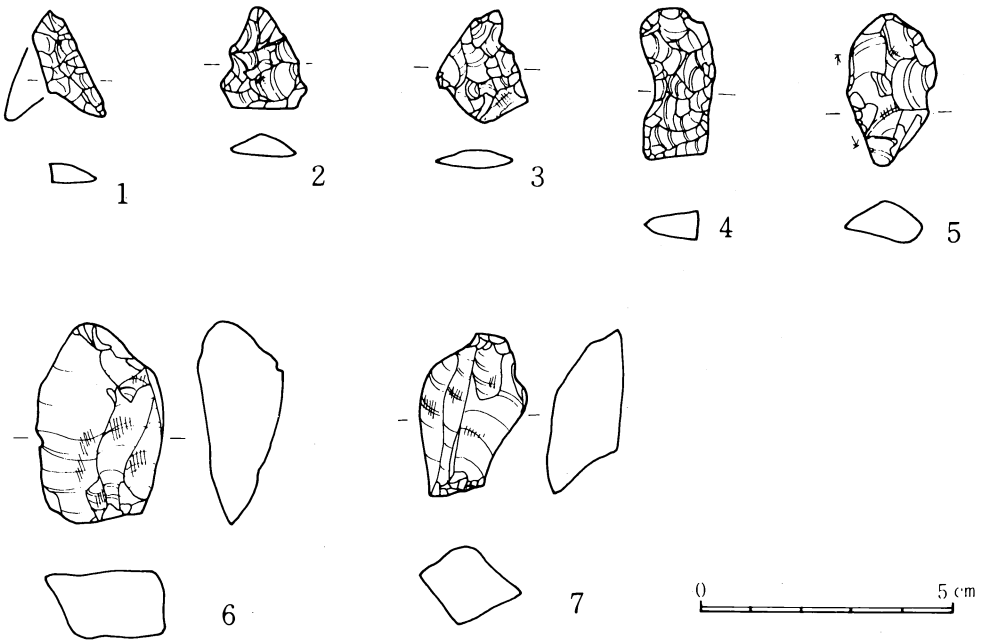
番号	発掘区	種　別	石　質	長さ(mm)	巾 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特　徴
1	12H	石鏃	黒曜石	15	11	3	0.3	
2	〃	スクレイパー	〃	28	17	7	3.1	
3	〃	〃	〃	21	22	9	1.8	
4	14H	石鏃	〃	19	17	4	0.9	



第26図　遺構外出土土器

土　器　観　察　表

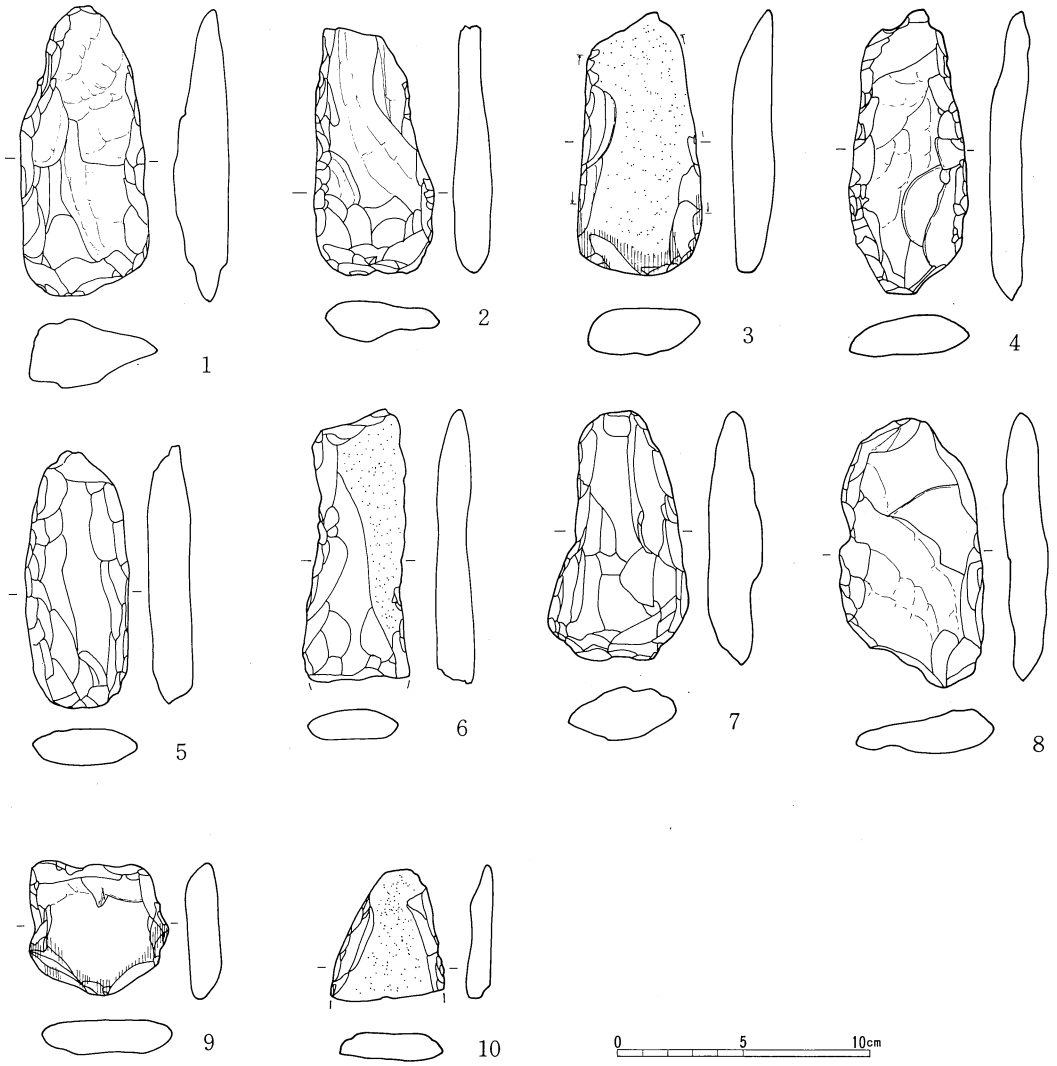
番号	発掘区	種別	器種	法径 (mm)			色調		焼成	成形調整方法		備考
				口径	底径	器高	内	外		外面	内面	
1	H	縄文	深鉢	310	—	—	褐色	褐色	良好		ナデ	
2	F	〃	〃	—	120	—	茶褐色	茶褐色	〃		〃	
3	H	〃	〃				〃	〃	〃		〃	
4	G	〃	〃				暗褐色	〃	〃		〃	
5	E	弥生	〃				黄褐色	黄褐色	〃		〃	
6	E	〃	〃				〃	〃	〃		〃	
7	F	土師	杯	147	90	50	赤褐色	赤褐色	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	
8	〃	〃	〃	105	57	31	暗褐色	暗褐色	〃	〃	〃	
9	〃	〃	甕	146	—	—	褐色	褐色	〃	〃	〃	



第27図　遺構外出土石器(1)

石　器　観　察　表

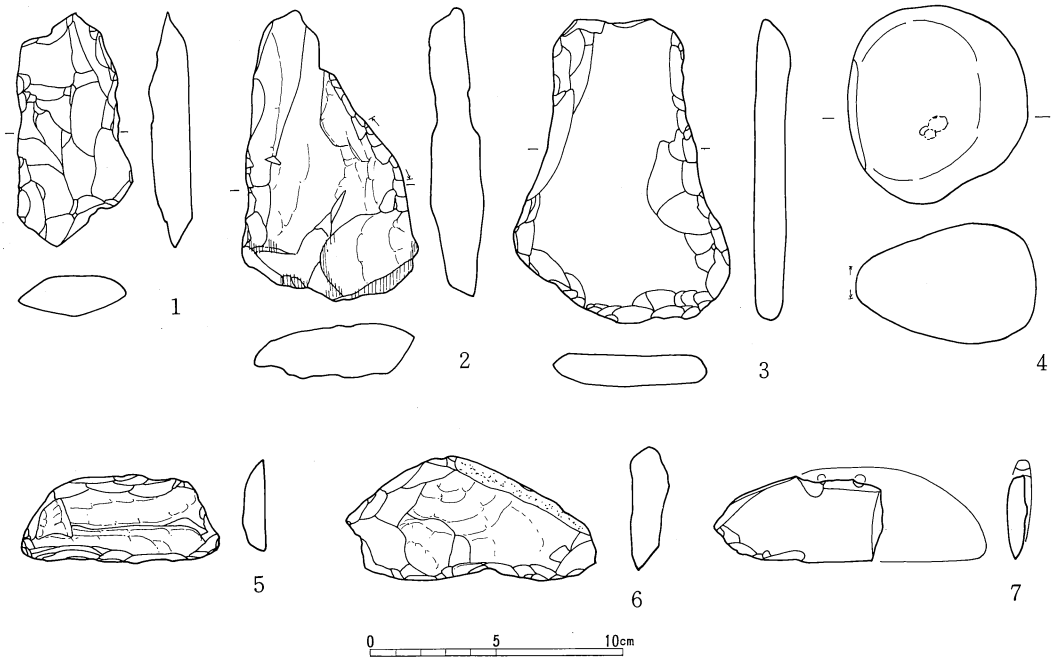
番号	発掘区	種　別	石　質	長さ(mm)	巾 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特　徴
1	G	石鏃	黒曜石	20	9	4	0.9	
2	H	〃	〃	20	17	5	1.3	
3	E	〃	〃	22	18	3	1.3	
4	G	スクレイパー	〃	30	15	5	3.4	
5	H	〃	〃	30	17	8	3.3	
6	F	ピエス・エスキーユ	〃	40	25	17	14.2	
7	F	〃	〃	32	21	14	7.0	



第28図　遺構外出土石器(2)

石　器　観　察　表

番号	発掘区	種　別	石　質	長さ(mm)	巾 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特　徴
1	F	打製石斧	硬砂岩	117	52	12	115	
2		〃	頁岩	100	48	16	78	
3	H	〃	〃	104	49	16	102	
4	〃	〃	〃	114	47	14	78	
5	F	〃	〃	103	41	17	82	
6	D	〃	〃	109	42	14	78	
7	C	〃		100	56	21		
8		〃		108	57	15		
9	H	〃		54	56	13	57	
10	C	〃	頁岩	53	45	10	25	



第29図　遺構外出土石器(3)

石　器　観　察　表

番号	発掘区	種　別	石　質	長さ(mm)	巾　(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特　徴
1	C	打製石斧	頁岩	93	57	16	66	
2	F	〃	〃	117	71	20	139	
3	A	〃	細粒砂岩	121	86	12	172	
4	F	凹石		80	71	47		
5	D	横刃型石器	珪質頁岩	35	78	9	30	
6	C	〃		49	100	16	66	
7	H	石包丁		34	66	8	26	

第Ⅴ章　まとめ

田川流域の上、中、下西条地区は、近年、圃場整備事業、区画整理事業が進み、これに伴った埋蔵文化財の発掘調査が盛んに実施されている。

縄文時代前期、弥生時代後期、平安時代の大集落址である中西条所在の田川端遺跡、縄文前期、平安時代の上西条、中西条所在の宗張遺跡、縄文後期、弥生後期、中世の集落址の塩尻町、大小屋の砂田遺跡、そして縄文中期、弥生中期、平安各時代の下西条所在久野井遺跡などがすでに調査されている。

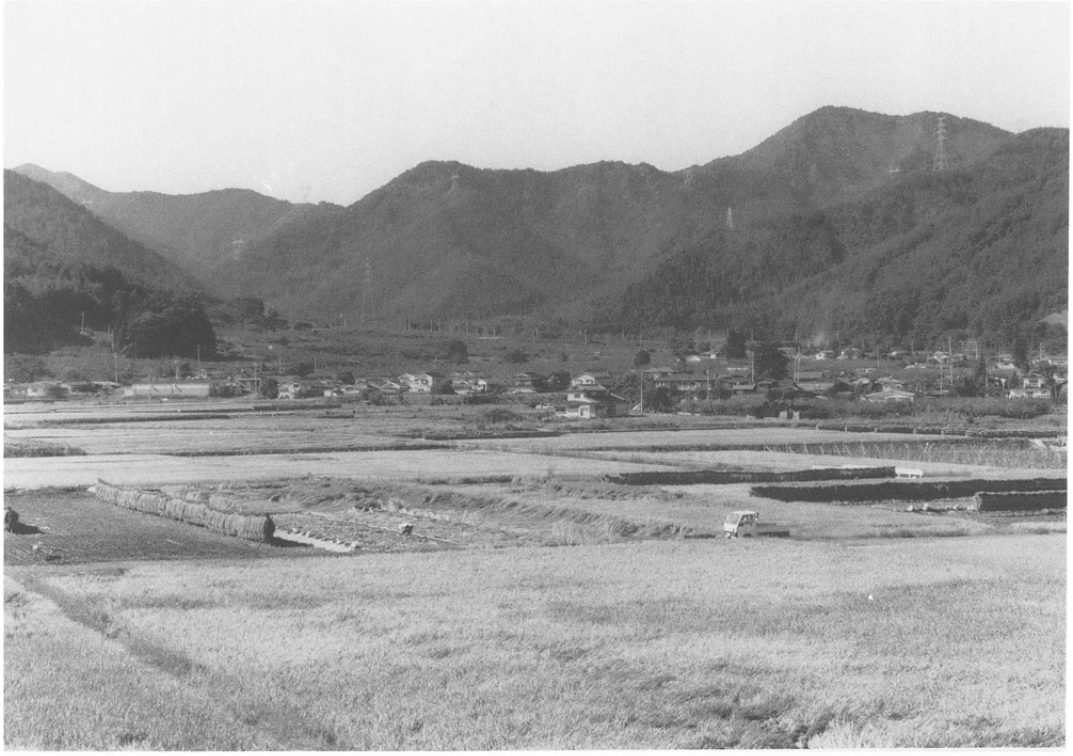
今回の三嶽西遺跡は、前記各遺跡と同様に、田川に臨む山麓に立地し、時代も縄文前期、中期、弥生、平安、中世の各時代にわたる大集落址である。田川流域という同じ環境下に発達した他の類似遺跡との関連性を追求することも今後に残された課題である。

三嶽西遺跡は、当初、縄文前期の遺跡と考えられていたが、今回の調査ではその片リンすら見られなかった。今回の調査地区は前期遺物が採集された地域と若干の距離があり、立地も台地上と台地下というように微妙に異なるため、あいは別の遺跡とした方が妥当かとも思われる。

今回の調査での大きな成果は、縄文中期および平安時代の集落址の発見である。縄文中期の集落地としては、周辺に下西条久野井、栃久保、上西条焼町などがあるが、いずれも中期中、後葉を主体とするが、三嶽西遺跡ではこれよりやや時代と逆上る中期初頭を中心としている。遺跡の動きを考えるうえで重要な資料となろう。平安時代集落には、下西条栃久保、久野井、中西条田川端がある。塩尻市域では、この地域は、記常塚、銭宮、狐塚と比較的古墳の多い地域である。しかし今のところこの時代の大きな集落址は未発見である。比較的早く開発された地域であったことが察しられるが、集落という景観を把え得るのはやはり平安時代に入ってからである。この時期により一層の開発が進められたのであろう。雄大な墨書土器に、この地に住んだ平安時代の人々の活力を見る思いがする。

発掘は、トレンチ掘りで、遺跡全体の１％にも満たないが、すでに10数軒の住居が発見されている。遺跡全体では100 軒を越える数の住居址が埋蔵されていることであろう。将来の調査に期待するところ大なるものがある。

最後に、今回の調査遂行にあたり、地元関係者の皆様、発掘に携わっていただいた方々に深く感謝申し上げます。



遺跡遠景（東側から）

遺跡遠景（南側から）

図版 2

Aトレンチ

Dトレンチ

Fトレンチ掘り下げ

Hトレンチ

三　嶽　西　遺　跡

—長野県塩尻市中西条地区土地改良事業
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—

平成元年３月20日発印刷
平成元年３月22日　発行

発行　塩尻市教育委員会
印刷　株式会社 アート